

文芸投書雑誌『文庫』『新声』にみられる
「地方文壇」の青年たちの地方意識と
「中央文壇」へのまなざし
— 小木曾旭晃と入澤涼月の事例を中心に —

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2019年3月

宮本温子

目次

- 序章（三～八頁）
- 一章 地方青年と文芸投書雑誌（九～十五頁）
- 二章 文芸投書雑誌にみられる地方意識
- 一節 読者から編集部へ（十六～二十六頁）
- 二節 編集部から読者へ（二十六～二十九頁）
- 三節 「地方文壇」（二十九～三十二頁）
- 四節 地方雑誌『文壇』にみられる地方意識（三十二～四十二頁）
- 三章 「地方文壇」という問題
- 一節 小木曾旭晃と「地方文芸史」（四十二～五十二頁）
- 二節 入澤涼月と小木曾旭晃の「地方文壇」観（五十二～五十八頁）
- 補節 小木曾の個人史における「地方文壇」の意義（五十九～六十二頁）
- 終章（六十三～六十五頁）
- 脚注（六十五～七十二頁）
- 参考文献（七十三～七十四頁）
- 謝辞（七十五頁）

序章

本研究は、主に明治二十年代後半から明治末期にかけて刊行されていた文芸投書雑誌『文庫』（明治二十八年～明治四十三年）『新声』（明治二十九年～明治四十三年）における地方在住の読者の言論活動および、「地方文壇」における彼らの活動に着目する。

文芸投書雑誌とは、読者によって投稿された文学作品（短歌、俳句、新体詩、小説、漢詩、評論、誌友交際欄への投稿など）を編集部が選別し、評価をつけたものを誌面の大半を割いて掲載していた雑誌の総称である。これらの雑誌は当時の青年たちに文壇への登竜門として受け入れられ、彼らの盛んな文学熱を育む場となった。実際に、『文庫』『新声』はそれぞれ多くの詩人、俳人、小説家を輩出することとなった。¹

『文庫』『新声』をはじめとする文芸投書雑誌が日本各地に中央メディアとして流通した背景には、これらの雑誌の刊行された明治三十年代を中心に、郵便制度と鉄道等のインフラの整備による運送面の全国的なネットワークの構築がようやく整いはじめたことが考えられる。それを郵便という観点から見れば、明治四年から十八年にかけて郵便線路の延距離の合計は、陸上郵便線路は約四十一倍、水上郵便線路は約六十倍になっている。一方、鉄道は明治二十二年に東海道線の新橋―神戸間の開通、続いて明治二十四年日本鉄道の上野―青森間、明治二十六年上野―直津間、明治二十七年山陽鉄道により広島までが開通、明治三十四年馬関まで開通、明治三十一年北陸線の富山―敦賀間が開通となっている。こうして全国に鉄道が走り始めると同時に、地方においては様々な出版流通業も開業しはじめた。これらの背景に後押しされるように、明治三十年前後から新聞・雑誌・書籍の全領域にわたって中央活字メディアの地方進出が激化した。永嶺は当時の状況を「ベネテイクト・アンダーソンの言葉を使えば、中央の活字メディアの流通しえる地理的範囲の拡大と流通速度の向上によって、中央の出版資本主義が日本全国の読者に「同時性の概念」を植え付けていった時代」としている。²

明治二十年代後半から全国に流通した両誌は、旧制中学校卒業以上の青年を主な読者層に想定し、全国各地に読者を有していた。そのため、誌面上では、しばしば地方在住の読者が各地の「読書界」や「地方文壇」のようすを報じ、編集部が地

方の青年たちを啓蒙し激励しようとするすがたをうかがうことができる。地方の青年たちは、誌面において地方青年としての境遇や苦悩を他の青年と共有しあったが、このような誌面を介した交流は、文通や「誌友会」の開催等の「誌友交際」へと発展し、全国規模の文学青年の交流のネットワークを構築した。また、そこで形成された地方青年による共同体によって全国各地で地方雑誌が刊行された。こうした、各地の地方雑誌の出版を拠点にした青年の共同体が「地方文壇」を形成し、地方青年たちはその一員として「中央文壇」への半追隨の姿勢をとった。しかし「地方文壇」を「中央文壇」に影響の受けない地方青年の全国的なネットワークを形成する野心を叶える場として期待する青年たちもいた一方で、自分の郷里の文人を「中央文壇」へ戦略的に輩出するための舞台として利用した青年も存在し、そこに所属する青年各々によってその捉えかたは異なっていた。

全国各地に地方雑誌が誕生し、それらが「地方文壇」としての連帯感を持って「中央文壇」に対抗した当時の状況を、長尾は「地方在住の投書家が、投書をきっかけに結びついて原稿を集め、東京への強い対抗意識をもちつつ、同人雑誌を発行していく現象が全国的に確認できるのは、やはり明治後期固有の現象であるように思われる」と紹介している。それでは、ここで指摘されている固有の現象とはなんだろうか。

『地方文芸史』を編纂した小木曾旭晃によれば、全国各地で投書雑誌の「誌友交際」によって文学青年らが共同体を形成し、地方雑誌が刊行されるようになるのは明治三十年代以降であり、つまり『文庫』『新声』の時代と時を同じくする。また、当時の投書青年たちと、両誌廃刊以降の投書青年たちの志向の差異に関しては、『文章世界』(明治三十九年〜大正九年)の読者の青年たちが文章修練よりも文学的な啓蒙の場を求めている^{三三}ことが指摘されていることからこの固有性は明らかである。宮崎^{三三}の報告によれば、『文庫』『新声』が「誌友交際」に支えられた「青年の友」としての読者のつながりを育むことで読者を獲得したのに対し、『文章世界』の読者たちは、誌友交際よりもより実際的にプロの作家になるための有意義なものへの要求を持つようになったことが指摘されている。つまり、投書形式で作品を評価する『文庫』『新声』は、硯友社等の有名作家に弟子入りすることでしたか作家への道が開かれていなかった当時において、その職業作家への登竜門としての平等性が青年たちから歓迎されたが、実際は「誌友交際」によって同志を見つけた青年たちが、その交流の中で自身の文学

への欲求を満たしていたにすぎなかった。

『文章世界』の読者の投稿からは、こうした状況への反発をうかがうことができる。

「文庫」「新声」の様に青年の友たるのみではいけない、師たるべし、評釈ものを多く掲載すること。例は漢文、漢詩、和歌の評釈や、文学論の講義なども毎号掲載すること（『文章世界』「読者通信」明治四十・七・五）

また、宮崎は明治四十年以降の『文庫』『新声』等の文芸投書雑誌の衰退の原因は、印刷代の低下によって、青年の小遣い銭で気軽に同人雑誌が作れるようになったことや、誌面上でのやり取りであるが故に新人作家の教育に限界があった文芸投書雑誌の性格が、雑誌に投書を掲載されて文壇で認められようとする投書青年たちの野心を叶えなかったことなどを指摘している。

実際に、文芸投書雑誌の投書家上がりで職業作家になることができた青年はごく一握りであった。つまり『文庫』『新声』は各地の青年の作品を「中央」に集めることによって、多くの地方青年から「中央文壇」の雑誌として受け入れられていたが、結局はあくまで素人の作品を多く掲載していたにすぎず、職業作家の作品の発表の場となっていた『太陽』『新小説』等の雑誌と比較すればどうしてもアマチュア色を帯びてしまうこととなった。また、『文庫』『新声』等の雑誌の誌面を介して「誌友交際」を行なった青年たちが作った地方雑誌はそれに追隨する立場をとるということになるが、そのなかでも序列や派閥が存在していた。

本稿では、こうした「地方文壇」の萌芽と『文庫』『新声』という全国誌による投書ブームの密接な関係性に着目し、当時の地方青年がとらえた「中央」と地方、双方のすがたを考察する。

第一章では、地方青年による文芸投書雑誌の受容を考えるために、『室生犀星『性に目覚める頃』の記述と、地方の投書青年であった河野紫雲の事例から、地方においてどのような青年たちが文芸投書雑誌に投稿を行っていたのか、あるいは、投書家としての活動が地方の読者にとってどのような意味を持っていたかを考察する。

第二章では、『文庫』『新声』の誌面から、地方の読者がいかに地方意識表出させたのか、あるいは、どのように編集部が全国各地に散居する読者たちに、『文庫』『新声』読者としての一体感を与え、投書青年の時代を形作ったのかを考察する。

加えて、両誌と読者層の重なりが確認され、全国的に読者を有していた地方雑誌『文壇』における誌面分析も行い、地方雑誌と「中央文壇」の雑誌双方の、雑誌を介した地方へのまなざしの差異を明らかにする。

第三章では、第二章における誌面分析においてもしばしば登場する「地方文壇」という概念について考察していく。「地方文壇」という言葉は、東京以外の地域における新聞雑誌及び書籍等の出版活動を中心として形成された人々の共同体を指し示す言葉である。この言葉は、たびたび『文庫』『新声』誌上の記事タイトルにも表れ、こうした記事においては、たいいていの場合、各地方において刊行されている雑誌やその関係者らが紹介された。

このような地方の雑誌出版活動を指し示す言葉であると同時に、「地方文壇」は、地方の投書家らによる「中央（東京）文壇」への対抗心の表れでもあり、地方において活躍する投書家の連帯感を強め、そこでの文学活動の拠点としての側面も持ち合わせていた。しかし、「地方文壇」という言葉もそこに所属する青年各々によって異なる意味合いを持っていた。それを探るために、『文庫』『新声』の投書家であり地方雑誌の主宰者でもあった、小木曾旭晃と入澤涼月という二人の地方青年の事例を参照していくこととする。

また、明治後期の文芸投書雑誌の読者を取り上げた代表的な先行研究は、以下の通りである。

関は『文庫』の読者青年に着目し、その読者層や志向を、誌友会のアンケートを元に考察している。また、『文庫』誌面が読者である青年たちに読者同士、あるいは読者と編集部の双方向的で自由なコミュニケーションの場を提供し、彼らに共同体意識を芽生えさせたことを指摘している。こうした文芸投書雑誌上におけるコミュニケーションは、誌面上にとどまらず、しだいに文通や「誌友会」等の「誌友交際」となって読者同士のネットワークが構築されていくこととなる。

長尾によれば「誌友交際」は明治二十年代半ばから明治末期にかけて各地で見られ、「誌友交際」ブームの背景には、雑誌発行者側の読者獲得戦略と、当時の少年たちの文章を書き発表したいという要求をかつての世代に見られないほど強固に有していたことを指摘している。また、雑誌を主な舞台とする「誌友交際」は、従来の新聞投書が中央―地方ラインの構造を取っていたのに対し、中央―地方だけでなく地方―地方という独自のネットワークを築き上げていたことや、こうして形成された「誌友交際」のネットワークは、強烈的な政治志向の形成というよりは、文章の練磨と相互批評のうちに充足を得るように

なる、「文学青年」の誕生を促すもの」であったと述べている。

また、本稿は『文庫』『新声』を購読していた地方青年の事例として地方雑誌『山鳩』の主宰の小木曾旭晃とその周辺の青年、『山鳩』と同時期の地方雑誌『白虹』の主宰であった入澤涼月の事例を取り上げる。太田は『山鳩』『白虹』および両誌の編集者である小木曾と入澤をはじめとする当時の「地方文壇」を担った青年たちを以下のように紹介している。

地方文芸に尽力してきたかれらの大半は明治二十年代前後に出生、日清戦役前夜の短歌、俳句革新の気運につれて続出した「文庫」「新声」などに投書時代をすごし、三十年代の清新なロマンチズムにその資質を洗練され、中央誌やその他の地方誌と相互関連しながら地方文芸運動を推進して来た。しかし、自然主義の台頭にもなう小説の隆盛、その反響としての名詩歌集の簇出、近代的センスを横溢させた中央誌の叢刊というさまざまの変革期の四十年代初頭、地方文芸推進者の彼らは文学と実生活の岐路に立たされたのである

このように、従来の研究において、明治後期に隆盛を極めた文学青年による共同体が全国にまたがるネットワークをもち、盛んに交流しあい、時に「中央文壇」への対抗意識を共有しあっていたことが指摘されてきた。しかし、実際に『文庫』『新声』誌面に見られる地方青年の意識と、明治三十年代以降の「地方文壇」および各地の地方雑誌の勃興の密接な関連に着目した研究はまだない。本稿では、『文庫』『新声』等の中央誌の読者の地方青年たちが誌面を通して、『文庫』『新声』読者としての「中央」の視点から地方を見つめつつも、「地方文壇」を形成して「中央文壇」と敵対した当時の状況に着目し、「地方文壇」という拠点が、彼らの青春時代をかけた自身の文学に対する立身出世の野心の中でどのような働きをしていたかを明らかにしたい。

また、先述のように、本研究が取り上げる文芸投書雑誌は、鉄道や郵便制度の充実にともない出版物の全国的な流通が始まった明治三十年代を中心に刊行されている。出版流通網の黎明期にあたる当時の時代背景において、地方に生きる人々は「中央」からの刊行物を購読することによってどのような意味を見出したのだろうか。あるいは、「誌友交際」によって地方に居住しながら全国的なネットワークを有することとなった青年たちは、誌面を通して出会った人々とのつながりに何を期待し、どのような活動を行なったのだろうか。以上を考察することにより、明治後期の地方と「中央」をむすぶ情報社会の側面

を明らかにすることができると考える。

第一章 地方青年と文芸投書雑誌

第一章では、主に明治二十年代終盤から明治末期にかけて全国に流通した『文庫』『新声』をはじめとする文芸投書雑誌が、地方在住の読者にどのように受容されてきたかに着目する。

まず、こうした地方の読者の代表例として、室生犀星（一八八九―一九六二）の小説『性に目覚める頃』（一九一九）⁵¹を取り上げたい。この小説は、作者が投書青年として活躍していた青少年期を振り返って書かれたものであり、当時熱心に投書に取り組んだ雑誌として、『新声』をとりあげている。

そのころ私は詩の雑誌である「新声」をとって、はじめて詩を投書すると、すぐに採られた。K・K氏の選であった。私はよく発行の遅れるこの雑誌を毎日片町の本屋へ見に行った。この「新声」の詩壇に詩が載ることは、ことのように地方にいるものにとっては困難なことであったし、実力以外では殆んど不可能なことであった。そのかわりそこに掲載されれば、疑いもなく一個の詩人としての存在が、わけても地方にあっては確実に獲得できるのであった。私はペエジを繰る手先が震えて、…肝心の自分の詩のペエジを繰ることのできないほど慌てていた。…東京の雑誌でなければ見られない四六二倍の大判の、しかもその中に自分の詩が出ているという事実は、まるで夢のように奇蹟的であった。

この文章から、『文庫』『新声』が地方においていかに熱心な読者を有していたかがうかがうことができるだろう。また、ここから、地方の読者の投書熱の要因として、自分の作品が活字となって全国紙に掲載されることや、名だたる選者に自分の作品を評価されることなどと大きく関係していることは明らかである。しかし、ここでは、こうした雑誌に掲載されることが自身の地方における文学活動における名声に直接的に関わっているという想像力が読者の青年たちの間にはたらいていたことに注目したい。東京で出版され全国に流通する『文庫』『新声』において自分の作品が評価されることは、東京の文壇、つまり「中央文壇」において評価されたことを意味し、地方で出版される文芸雑誌における評価とは決定的に違っていたのではないだろうか。

また、「二個の詩人としての存在が、わけても地方にあつては確実に獲得できる」とあるように、こうした雑誌における成功は、しばしば郷里における名誉にも大きく関係していたようだ。このことを念頭に置き、次の場面を見ていきたい。

私は雑誌を机の上に置いたり読んだりしているうちに、これは是非父に言っておかなければならないと思いつながら、何だか非常に恥かしくも感じたが、しかし言いたくてしかたがなかった。私は父の室へ雑誌をもつて這入つて行つた。「東京の雑誌に私の書いたものが載つたんです。この雑誌です。」と私は「新声」をとり出した。父は私の詩をよんでみたが、解りそうもないらしい顔をした。いくたびも読みかえして、「むかしの漢詩みたいなものだ。それとは違うかな。」：私は苦笑した。：あの雑誌を読む人人はみな私のものに注意しているに違ひないと思つた。この故郷の人も隣の若い娘らまできつと私の詩をよむに違ひない。私は全世界の眩しい注目と讚美的になつてゐるような、晴晴しい押え難い昂奮のために、庭へ出て大声をあげたいようにさえ思つた。私の詩のよしあしを正しく批判する人は、決してこの故郷にはいないように思われた。私は私の故郷に於いて最も勝すぐれた詩人であることを初めて信じていいと思つた。

ここで留意すべきなのは、主人公が父親に雑誌を見せた時に、得意顔の主人公とは裏腹に、父親はてんで要領を得ない反応しか寄越さないところである。『文庫』『新声』は総合的に短歌や漢詩、小説、評論などさまざまジャンル作品を横断的に掲載していたが、犀星が『新声』を「詩の雑誌」と表現しているように、『文庫』『新声』は多くの詩人俳人を輩出した。

その中でも新体詩は、明治十五年『新体詩抄』の刊行に先駆けて青年らの間に広まって以来、明治期以降に産声をあげた新しい時代の文学として、雑誌の中でもっとも勢いのあるもののひとつとして受け入れられていた。^三

しかし、当然こうした文学は実生活の人である主人公の周囲の人々にはあまり馴染みのあるものではなく、主人公自身も「私の詩のよしあしを正しく批判するに値する人は、決してこの故郷にはいないように思われた」と周囲の人々を評価しているのである。それと同時に、「あの雑誌を読む人人はみな私のものに注意しているに違ひないと思つた。この故郷の人も近隣の若い娘らまできつと私の詩をよむに違ひない」という記述があるのは見逃せない。

実際に雑誌を読んだ父親の反応を見てもなお、「晴晴しい押え難い昂奮のために、庭へ出て大声をあげた」くなるような

彼の興奮は一体どこからやってくるのか。その背景には、文芸投書雑誌の先駆的存在であった『穎才新誌』（明治十〜三十一年）からの伝統があると考えられるのではないだろうか。

『穎才新誌』は若き日の尾崎紅葉、山田美妙、佐々木信綱、大町桂月、田山花袋等の著名な人物が投稿を寄せたことで有名である。彼らは学校教育においてその素質を見出され、郷里を代表するエリートとして投書を行なっていた。前田愛は、誌面に掲載された彼らの文章は、教師による添削を介して投稿されていたことが推測されると同時に、そこから彼らの投稿は本人たちの名誉と同時に郷里の名誉をかけたものでもあることが考えられ、一種の「郷党意識」を読み取ることができると指摘している。^{三三}以上のような、投書を介した自身の名誉と郷里の名誉（あるいは郷里における自分の名誉）への想像力が『文庫』『新声』読者の青年らにおいても生きていたのではないだろうか。

もちろん、こうした投書青年の名誉が、どの青年にとっても一般的であったとは限らないという点には留意しておく必要がある。柳田泉（一八九四〜一九六九）の著書の『幸田露伴』（一九四二）における以下の記述は見逃せない。

穎才新誌などといふ投書雑誌もこゝ（筆者註…友人の実家であり文房具等を扱う店）で知つたが、かういふ雑誌に投書することは、当時の気を負うた青少年はいやしいこととしてゐた。それで善野（露伴の友人で雑誌、文房技、板絵を扱う店の息子）はもちろん、露伴なども一度もそんな雑誌に投書しようなどとは試みたことはなかつた

つまり、『文庫』『新声』は当時の多くの青年らが熱意を持って投書を行なつた時代の流行としての側面を持ちつつも、これらの投書雑誌をめぐる野心は、必ずしも上昇志向のある青年すべてに共通していたわけではないのである。

確かにこうした『文庫』『新声』をはじめとする文芸投書雑誌は「中央文壇」への登竜門と目され、文学的な野心を持って投稿に勤しんだ青年は多く存在していた。犀星がその中から「中央文壇」と郷里、双方における名誉を感じ取ったことから、これらの雑誌を購読し投書を行うことは一種の上昇志向に起因すると考えられる。しかし、それは露伴の言うところの「気を負うた青年」がもちうる上昇志向とは性質を異にするものであったと考えられる。

また、『文庫』『新声』の特色として、編集者と読者の関係性が非常に密であったことがあげられる。先の引用にも登場したK・K氏とは『新声』詩壇の選者であった金子薫園のことであり、犀星も薫園と個人的なやり取りをしていたことが以下

の文章からうかがえる。

選者のK・K氏に長い手紙をかい、自分は決して今の小さきでいたくないことや、これからも殆んど自分の全生涯をあげても詩をかきたいことなどを伝えた。：返事が来た。「君のような詩人は稀れた。私は君に期待するから詩作を怠るな。」とあった。：にじりつけたような墨筆で「北国の荒い海浜にそだった詩人に熱情あれ。」というような、何処か酒場にでもいて書いたもののようなハガキも来た

このような、文芸投書雑誌特有の、編集者と読者、読者同士コミュニケーションの双方向性が、雑誌におけるプロとアマチュアの垣根を曖昧にし、両者の交流を活性化させ、雑誌読者の一体感を増幅させていた。また、雑誌に作品を掲載され、交流の人脈を得た投書青年を、まるで自分が一端の青年文士になったかのように錯覚させていたのもこうした仕組みによるものだろう。

編集部と読者の交流が盛んであった以上に、文芸投書雑誌は全国各地に住む読者同士を結びつけ、誌面上、文通にとどまらず、誌友会などの対面の交流も活発に行われていた。犀星自身もこうした「誌友交際」を行なった青年の一人であった。うだ。

そのころ私と同じく詩をかいしている表悼影という友人がいた。この友は、街のまん中の西町という処に住んでいた。私に交際したいという手紙をよこしてから三日目に、この見ず知らずの友は、私の寺をたずねにやって来た。：私もすぐにこの新しい友を訪ねた。姉さんと母親との三人ぐらして、友の室は二階の柿の若葉した瑞瑞しい窓際に机が据えられてあった。「新声」や「文庫」という雑誌が机の上に重ねてあった。

ここまで室生犀星の記述にそって地方青年による文芸投書雑誌の受容を考えてきたが、ここに記されている犀星の地方青年としての文芸投書雑誌へのまなざしは、他の青年にとっても一般的なものであったのだろうか。また、地方の読者は何をきっかけに文芸投書雑誌を購読したのだろうか。さらに、「誌友交際」において結びついた青年たちの活動はどのように営まれていたのだろうか。これらの問題意識を持ちつつ、地方青年と文芸投書雑誌の関係性への理解を深めるために、ここで他の地方青年の事例にも着目してみたいと思う。

したがって、犀星と同じく『新声』の読者であった河野省三（紫雲）（一八八二～一九六三）の事例を取り上げたいと思う。

河野は、のちに国学院大学の学長となる人物であるが、青年期は埼玉の地方青年として様々な投書雑誌に投稿を行っていた。晩年の彼の回想録『教育の友・若い頃の思ひ出』（一九五五）を参照しながら、青少年期の彼と文芸投書雑誌の関係性を考察していきたい。

河野は、高等小学校一年生の夏季休業後から翌年の二月にかけての約半年間の不登校生活の間に、父親によって四書の素読を教えられ、その間新聞紙『日本』に興味を抱いたことや、通学再開後に授業の課題として出された作文を評価されたことを背景に、徐々に雑誌に作品を投稿することに関心を示すようになる。以下は、学校に復帰後に書いた作文を評価された時に関する記述である。

間も無く直してこれを返された井田先生が特に私の十點の作文に、筆と口とで感心した批評を添へて、次の作文の間に渡された。此の事が急に私の作文に對する勇氣と趣味とをひき起こした。そしてその頃、学校で平井先生が二三部まとめてとつてくれた少年雑誌「小国民」（後に「少国民」と、東京の兄から私の学校復活を悦んでから毎月のように送つてくれる雑誌などに對する関心が深くなり、著しく読書欲が萌え出して来た

この記述から、河野の新聞雑誌を始めとする「中央」からの印刷メディアとの接触は、家族や学校教員によってもたらされたものだったことがわかる。しかし、この時点ではあくまで雑誌との接触という程度にとどまり、実際に自分の作品を投稿するという段階には至らなかつたようだ。彼が本格的に投書家として活躍するきっかけを与えたのは、尾崎白水（本名尾崎秀眞、ゾルゲ事件の尾崎秀実の父）の主宰した『新少年』（刊行年代不明）との出会いだったようである。

そのうち廿九年一月に創刊した「新少年」といふ雑誌も多分、在京の兄が送つてくれたかと思ふが私の興味を引き、是までよく「小国民」などに出した「考へ物」の答から一步を進めて、投書というふ事に乗出すやうになつた。それで其の年七月下旬発行の「新少年」第十三号の「文林」欄に、生まれて初めての寄稿が掲載された。本当に物珍しい

心ときめきする「雑誌に載った」時の気持ちであった。後になつては、殊に現代のやうなつづり方の進んで来た今日から見れば、恥ずかしい程幼稚なものであるが、それは實に私にとつては、「好きな投書」への豊かな魅力であつた『新少年』で投書家デビューを飾ったことをきっかけに、彼は他の文芸投書雑誌にも意欲的に投稿を重ねる傍ら、「社友には、多分一ヶ月十銭くらいで、十篇以内の作文を添削してくれるので、自分はかなり熱心にこの社友の特権を利用した」と回想にもあるように、前述の尾崎白水に『新少年』の「社友」制度を利用し、熱心に作文の添削を頼んでいたようである。河野は、そのころの雑誌界をふりかえり、「私が高小の末、中學の半ばころにかけて、若い読者の投書を歓迎した雑誌としては、中央に少国民、少年世界、穎才新誌、中學文壇、少年文園、少年俱樂部、中央文壇、櫻洲青年、學生園、文學界などがあつた」としているが、「それらの中で、一般の地方青少年の人気者は名古屋の「文壇」であつた」としている。この『文壇』（明治二十九年九月―明治三十四年？）において彼はさかんに「誌友交際」を行なっていたようである。その理由の一つには『文壇』の充実した支部制度が関係していると思われる。

それは一地方十名以上の読者があれば支部が設けられるので、何でも二百近くもあつたやうである。私も第六十支部長になつて、部員が三四十名も居り、さらに二支部を派生した。副支部長、何々部長など敷部属の組織で一町三四カ村の同志がほぼ月一回くらい集まって楽しい會合でもあつた

彼はこうした「誌友交際」を経て、有志の青年らとともに地方雑誌の刊行も手がけていたようだ。

そんな関係から私が中學に入ると、投書好きや雑誌に親しみのある上級生や同級のものから、近づきの名刺をもらひ、遂に明治三十二年の春寒に、地方で接骨醫として有名な蓮江医院（埼玉県北埼玉郡大田村真名板）に集まり、その梅之助、慶藏雨君兄弟や七、八名の熱心家が主となつて、同時に明治文學会を設けることとなり、當時、芝區伊皿子町へ轉住してみた白水尾崎秀眞を顧問にして、三月に「明治文學」を發刊した。その前に先づ同人で一回、「文友」を出した

熱心な投書家であつた地方の読者が地元の同志を集め、自分たちで雑誌を起こすという事例は、この明治三十年代から明治末期まで全国各地で盛んに見られた。こうした地方における雑誌や書籍の出版を中心とした文学活動はしばしば「地

方文壇」と称され、『文庫』『新声』誌面においても頻繁に話題に上がっている。「地方文壇」に関する詳細は第二、三章に譲るが、このような地方雑誌の大半の寿命はそう長くはなかったようである。河野たちの雑誌も同じ運命を辿ることとなる。

この新生の意気に燃えた「明治文學」も第二號で廃刊となった。正に謂はゆる三號雑誌である。これは會費未納が多いのにも困り、同人の学籍変更が多かったのにも困るが、ようやく各地に萌した地方文壇の熱心さの冷却も関係してゐた。

彼は、中学時代までこうした地方雑誌や『中学世界』における投書を行ったようである。「その終わり頃から國學院に入った初め頃、「新聲」の寄稿者の一人となつたのである」とあるように、河野が『新声』の投書家となつたのは中学卒業と同時にあつたようである。彼は、はじめて『新声』に文章が掲載された（「意志の満足」『新声』明治三十五・四）時の心境を「或る意味に於いて、少年文士が青年文士に進み、地方文壇から中央文壇に打つて出た私の新聲であつた」とふりかえっている。この発言からも、『新声』がひとりの地方の投書家を「地方文壇」から「中央文壇」の文士へと切り替える装置として当時の投書青年から認識されていたことがわかる。地方の投書家らが『文庫』『新声』にひときわ熱いまなごしを向けることとなつた要因は、両誌のこうした側面に由来するのだろうか。

よつて、『文庫』『新声』は地方青年にとつて、「中央文壇」へのアクセス経路として文学的な野心を掻き立てると同時に自身の郷里における名誉や自分と同じような境遇の青年たちを意識させる装置としてはたらいていたと言えるだろう。また、以上の事例から、両誌がいわゆる「中央文壇」の雑誌であるという認識はだいたいの地方青年に共通してあつたと考えられる。

それでは実際に、地方において文学への志を持ち、『文庫』『新声』において投書家として活躍した彼らの、自らの郷里や他の地方、そして「中央文壇」に向けられたまなごしは、誌面においていかに現れているのだろうか。

第二章 文芸投書雑誌にみられる地方意識

第一節 読者から編集部へ

第二章では、文芸投書雑誌の誌面上における地方青年の言論活動、および編集部から地方青年へ宛てた記事を対象とし、そこで表象される「地方」と「中央」のすがたを考察していきたい。

文芸投書雑誌『文庫』『新声』はその刊行年代・内容の類似点の多さから、読者らの間では文壇における評価もほぼ同等と認識されていた。本稿では主に両誌の共通点に着目し、記事を取り上げていくこととする。ただ、留意すべきは『新声』の経営・編集陣が一新される明治三十七年以降は、『文庫』にも共通する新人の発掘、育成という態度よりも文壇ゴシップに寄った記事が多く見られるようになり、『新声』編集部の地方の読者へのまなざしもそれに少なからず影響を受けている点である。

誌面上では、たびたび地方の読者による地方から「中央」へのまなざし、あるいは編集部からの「中央」から地方へのまなざしが交差している。本稿では地方の読者、読書界、「地方文壇」、地方雑誌について直接的に言及している記事を取り上げる。第一章第一、二、三節執筆に際して参照した『文庫』および『新声』の記事は以下表①、②に記載する。本文中では、そのなかでも代表的なものを取り上げる。

《表①》『文庫』地方読者関連記事

巻号	年月日	ページ数	記事タイトル (大)	記事タイトル (小)	投稿者	投稿者の居住地
2巻3号	明治29年2月25日	200-202	田舎人		紫水生	佐伯
2巻5号	明治29年4月25日	462-463	関西文壇の消息。		記者	
4巻6号	明治30年3月5日	485-486	田舎青年に檄す		木岡愛水生	和泉
5巻4号	明治30年5月5日	289-292	田舎青年		紫水生	
9巻1号	明治31年6月5日	3	関の東西に於ける文学趣味。		鯉洋	
10巻6号	明治31年11月3日	511-512	函館便り		水母子	
11巻4号	明治32年2月11日	299-301	地方の読書界	(一) 神戸	戩翼庵	
		301-302		(二) 大垣	犬勘生	
		302-303		(三) 肥後	園生櫻	
11巻5号	明治32年2月20日	383-384	熊本読書界		雨汀子	
11巻6号	明治32年3月20日	473-475	地方の読書界	大阪	菊の舎	大阪
		476		一関	草村	一関
		476-477		野邊地	華眠子	青森
12巻1号	明治32年4月20日	15-17	地方の読書界	大阪の文壇	べいしう	
		17		東濃付知	坪井岸松	美濃
		17-18		熊本	鎮西太郎	
		83-85	垂水における文学同好会		さくら戸	
12巻3号	明治32年6月1日	179-180	地方の読書界	長崎	淡水生	
		180-181		読書界の鎮西太郎君へ	園生櫻	熊本
12巻4号	明治32年6月15日	248-250	地方の読書界	富山	都志津子	富山
		250-252		秋田	安部貞佳	
		252-253		杉戸	櫻艶山人	
12巻6号	明治32年8月15日	416-418	地方の読書界	能登の七尾	七轉郎	
		418-419		姫路	皮肉庵	
		420-421		京都	春霞	
		421-422		福岡	桃艶山人	
13巻1号	明治32年9月15日	19-20	地方読書界	備中高梁町	梁洲	
		20-21		麻布の読書眼	江戸紫	
		21-22		高岡通信	吟風	越中
13巻2号	明治32年10月15日	107-108	地方読書界	松坂	春曙	
		108-109		松本だより	みすどのや	
		109-111		高知の読書界	突天漢	
		111-112		飛騨の高山	瘠愿生	
13巻4号	明治32年11月15日	303-304	地方読書界	岡山	きびの山人	
		304-305		和歌山	月亭	
		305-306		石州濱田	琴遷舎	
13巻5号	明治32年12月15日	466-471	松風会の記		幹事の一人	
13巻6号	明治33年1月15日	499-500	地方読書界	琉球だより	はまのや	
		500-501		長府	静雨	
		501		福岡	弧雲生	
14巻1号	明治33年2月1日	22-23	地方読書界	作州津山	たんする	
		23-25		己亥の大阪文壇	なには男	大阪
		71-72	落葉片々		春酔	
14巻2号	明治33年2月15日	131-132	同人偶語 (一)			
14巻3号	明治33年3月15日	151-152	地方読書界	彦根	浩湖	
		152		長府	静雨	
		152		馬関	きんほ生	
14巻5号	明治33年4月15日	209-212	同人偶語 (二)			
		382-387	同人偶語			
		387-391	春期松風会の記		会員の一人 みかを	

14巻6号	明治33年5月15日	412-413	地方読書界	崎陽	告天子	
		413-414		豊前中津	緑陽山人	
		414		大牟田	瀧水	
		414		横川	ぼん太樓	
		414-415		羽前	ふえむら生	
		478-483	同人偶語			
15巻1号	明治33年6月15日	93-94	漫言一束		芋藏	
15巻4号	明治33年9月1日	298-299	京都の新聞雑誌界		齊藤紫軒	京都
		368-369	第一回金澤『文庫』誌友会の記		発起者の一人	
16巻1号	明治33年11月3日	18-21	大阪の文壇		扶風子	
16巻2号	明治33年11月15日	178-182	岡山文庫誌友会 枝豆会の記		発起者	
		189-192	秋季松風会の記(上)		醉茗	
16巻3号	明治33年12月15日	280-284	秋季松風会の記(下)		醉茗	
		286-288	名古屋『文庫』誌友会の記		発起者の一人	
16巻4号	明治34年1月1日	396-408	手紙と端書			
		408-410	小乾坤記		平民	播磨
16巻5号	明治34年1月15日	510-511	名古屋『文庫』誌友会の記(下)		発起者の一人	
		597-605	手紙と端書			
17巻1号	明治34年2月15日	11-17	三寸舌			
		92-98	手紙と端書			
		99-102	飛騨文庫誌友会 禿筆会の記			
17巻2号	明治34年3月15日	120-126	三寸舌			
		216-222	手紙と端書			
17巻3号	明治34年4月15日	233-240	三寸舌			
		333-237	手紙と端書			
17巻4号	明治34年5月5日	48-54	名古屋松風会の記			
		54-57	高岡『文庫』誌友会の記			
17巻5号	明治34年5月20日	353-356	三寸舌			
		439-443	第一回静岡『文庫』誌友会の記			
17巻6号	明治34年6月15日	463-470	三寸舌			
		542	第一回金山『文庫』誌友会の記			
18巻1号	明治34年7月15日	9-12	福岡の二新聞		縞衣郎	
		12-15	三寸舌			
		79-81	一関文庫誌友会の記		戯牛	
		81	辻川文庫誌友会		へちま	
18巻2号	明治34年8月15日	49-52	三寸舌			
		82-84	京都文庫誌友会の記		飛泉	
18巻4号	明治34年9月15日	12-17	三寸舌			
18巻5号	明治34年10月15日	36-41	三寸舌			
18巻6号	明治34年11月3日	99-100	第二回静岡『文庫』誌友会の記		発起者	
19巻1号	明治34年11月15日	18-21	三寸舌			
		80-82	山田『文庫』誌友会の記		発起者	
19巻2号	明治34年12月15日	112-116	三寸舌			
		175-177	第一回長崎『文庫』誌友会の記			
		177-178	関西に於ける来年一月の文学同好大会		▲▲▲記	
19巻5号	明治35年2月1日	436-439	三寸舌			
		468-471	大阪に於ける文学同好者新年大会		△△△	
19巻6号	明治35年2月15日	512-516	三寸舌			
		558	長崎第二回文庫誌友会記		レンズ	
20巻1号	明治35年3月15日	64-65	盛岡文庫誌友会		△△△	
20巻2号	明治35年4月15日	112-114	地方の新聞		西村文則	
		114-116	雑誌漫評		△□△	
		116-118	片々粉々			
20巻3号	明治35年5月15日	228-229	雑誌漫評		小颯子	
20巻4号	明治35年6月15日	334-348	大絃小絃(三寸舌の後身)			
		387-388	第三回静岡文庫誌友会の記		発起者の一人	

20巻5号	明治35年7月15日	441-452 440	大絃小絃 第三 山田文庫誌友会		AT	
20巻6号	明治35年8月15日	546-552 145	大絃小絃 第3回斐太誌友禿筆会		発起者の一人	
21巻4号	明治35年11月3日	319-322	大絃小絃			
22巻1号	明治35年12月15日	52-53	第三回長崎文庫誌友会の記		團栗坊	
22巻2号	明治36年1月1日	203-204	第四山田『文庫』誌友会記			
22巻5号	明治36年2月15日	407-410	大絃小絃			
23巻1号	明治36年4月15日	1-4	西南と東北と			
		16-21	大絃小絃			
		21-28	地方の文学雑誌及び其執事記者（上）			
23巻3号	明治36年5月15日	288-243	地方の文学雑誌及び其執事記者（下）			
23巻4号	明治36年6月15日	344-350	大絃小絃			
23巻5号	明治36年7月15日	518-519	誌友小集会の記		気の早成	
23巻6号	明治36年8月15日	534-537	大阪操觚界の近況		WO生	
24巻1号	明治36年9月1日	18-21	田舎新聞		禿頭將軍	
24巻5号	明治36年11月15日	374-379	田舎青年と都会			
		379-383	大絃小絃			
24巻6号	明治36年12月15日	466-469	大絃小絃			
25巻2号	明治37年1月15日	176-177	大絃小絃			
25巻3号	明治37年2月1日	194-198	地方新聞の初版			
		274-278	岡山第一回「文庫」松風会記			
25巻5号	明治37年3月15日	372-377	誤解せられたる「青年文士」		小島島水	
		383-387	大絃小絃			
26巻1号	明治37年4月15日	89-90	第二回一ノ関文庫誌友会の記		発起者	
26巻2号	明治37年5月15日	106-110	大絃小絃			
26巻3号	明治37年6月15日	194-193	六號活字（大絃小絃の後身）			
		264-266	関西『文庫』誌友会の記		藤霞	
27巻1号	明治37年9月15日	60-63	六號活字			
27巻2号	明治37年10月15日	158-102	六號活字			
27巻5号	明治37年12月15日	402-406	六號活字			
27巻6号	明治38年1月1日	483-485	地方の新聞（一）	『信濃毎日』と『長野』 附たり山路愛山、茅原華山、対陣の話		
28巻4号	明治37年3月15日	306-311	六號活字			
29巻1号	明治38年5月15日	42-46	六號活字			
29巻2号	明治38年6月15日	101-104	六號活字			
29巻5号	明治38年9月1日	358-359	文芸小品	地方の文学雑誌	松原至文	
29巻6号	明治38年9月15日	464-468	六號活字			
30巻1号	明治38年10月15日	15-20	六號活字			
		20	関西文壇の消長史			
30巻2号	明治38年11月3日	106-107	時局における京阪の新聞紙		六波子	
30巻4号	明治38年12月15日	256-258	片々録			
30巻5号	明治39年1月1日	399-401	地方文学	其一 信州諏訪	比牟呂	
30巻6号	明治39年1月15日	444-448	六號活字			
31巻1号	明治39年2月1日	9-13	六號活字			
31巻3号	明治39年3月15日	206-209	地方文学	秋田公論		
31巻4号	明治39年4月15日	363-380	松風			
31巻5号	明治39年5月15日	458-462	六號活字			
32巻1号	明治39年7月15日	78-80	六號活字			
32巻2号	明治39年8月15日	156-162	六號活字			
32巻6号	明治39年11月3日	483-486	文芸雑俎			
33巻6号	明治40年2月15日	501-506	六號活字			
34巻1号	明治40年3月15日	62-65	六號活字			
34巻3号	明治40年5月15日	286-295	六號活字			

34巻4号	明治40年6月15日	378-383	六號活字			
34巻5号	明治40年7月15日	475-476	六號活字			
		482-483	六月の地方雑誌		記者	
35巻1号	明治40年9月1日	74-78	六號活字			
35巻2号	明治40年9月15日	170-174	六號活字			
35巻3号	明治40年10月15日	289-291	六號活字			
		293-295	近時の地方文壇		薩摩隼人	
		295-297	地方雑誌散見		入澤涼月	
35巻4号	明治40年11月3日	393	時文	六號活字をいかにすべきか	井上葉川	
		394			地方文壇について	松田子琴
36巻2号	明治41年1月15日	216-217	近時の地方文壇		薩摩隼人	
36巻3号	明治41年2月1日	311-312	卓上食後			
37巻4号	明治41年2月15日	423-424	地方俳句雑誌の俳風（一）		俳論子	
		426-428	地方新聞雑誌の新年号			
		429-430	岡山「文庫」誌友会		七面記	
36巻5号	明治41年3月15日	527-530	卓上食後			
36巻6号	明治41年4月15日	634-635	地方俳句雑誌の俳風（二）			
37巻1号	明治41年5月15日	69-71	卓上食後			
37巻3号	明治41年7月15日	271-272	地方俳句雑誌の俳風（三）		俳論子	
37巻5号	明治41年9月1日	478	文芸新聞	地方文壇		
38巻2号	明治41年11月3日	161-163	地方文壇雑感		入澤涼月	
38巻5号	明治41年1月1日	439-440	文壇社会			

《表②》『新声』地方読者関連記事

巻号	年月日	ページ数	記事タイトル (大)	記事タイトル (小)	投稿者	投稿者の居住地
1巻2号	明治29年8月	108	新刊批評			
1巻3号	明治29年9月	162	新刊批評			
1巻4号	明治29年10月	224	新刊批評			
1巻5号	明治29年11月	282	新刊批評			
1巻6号	明治29年12月	338	新刊批評			
2巻1号	明治30年1月	40	新刊批評			
		44	田舎漢てふ事に付て		五木田幸太郎	上総緑海村
2巻2号	明治30年2月	105	直筆一行録			
		150	新刊寄贈			
2巻3号	明治30年3月	152	田舎の書生		二宮霞峰	
		330	浪華文士 懇親会通信		支部幹事 高須梅溪	
		331	秋田角館誌友懇話会概況		支部幹事 田口柳江	
3巻4号	明治30年10月	176	支部動静			
3巻5号	明治30年11月	174	支部動静			
3巻6号	明治30年12月	275	支部動静			
4巻3号	明治31年3月	170	動静			
		199	片々	東都の雑誌界		
		199	片々	地方の雑誌		
5巻5号	明治31年11月	262	落葉籟			
5巻6号	明治31年12月	319	落葉籟			
1編 (6巻) 1号	明治32年1月	59	落葉籟			
		79	草風小言	地方の風俗		
		106	落葉籟			
		166	落葉籟			
1編3号	明治32年3月	168-169	草風会々員氏名			
		169	江湖是非の声			
1編4号	明治32年4月	219-220	落葉籟			
1編6号	明治32年5月	403-404	落葉籟			
2編2号	明治32年8月	108-109	落葉籟			
		427	新刊漫評			
2編6号	明治32年11月	427-428	落葉籟			
3編1号	明治33年1号	76	落葉籟			
		187-189	甘言苦言 (これ以前未チェック)			
3編2号	明治33年2号	191	新刊批評			
		370	新刊寄贈			
3編4号	明治33年4月	370	端書投書			
3編7号	明治33年6月	649	新刊月旦			
		193-194	東京趣味と大阪趣味			
		259	一行二十一字誌			
4編6号	明治33年11月	614	新刊批評			
4編7号	明治33年12月	709	新刊月旦			
		104-105	新春の文壇			
5編1号	明治34年1月	107	新刊月旦			
		210-211	名古屋新声誌友第一会		発起者の一人	
		212-217	甘言苦言			
5編3号	明治34年3月	239-240	境風の機関			
		338-340	田園の裏面			
5編4号	明治34年4月	414-416	甘言苦言			
		417-418	甘言苦言			
5編5号	明治34年5月	524	新刊紹介			
		610-612	名古屋新声誌友第二会の記		発起者の一人	
		612-613	広島新声誌友第一会		発起者の一人	
5編7号	明治34年6月	719	新刊紹介			
6編1号	明治34年7月	91-93	富山新声誌友第一会の記		発起者の一人	
		194-198	甘言苦言			
		198-199	編集便り			
6編4号	明治34年10月	484-488	甘言苦言			
		492	記者と読者			
6編5号	明治34年11月	591	新刊紹介			
7編2号	明治35年2月	225-226	新刊略評			
7編3号	明治35年3月	325-329	京都新声誌友会の記		西川夕星	
		540-541	八面録			
		550	新刊紹介			
7編6号	明治35年6月	642	秋田新声誌友会の記		国安桂水	
		650	八面録			
8編1号	明治35年7月	100	新刊紹介			
8編2号	明治35年8月	199-200	八面録			
8編3号	明治35年9月	301	馬術録		河野省三	
8編4号	明治35年10月	406-407	八面録			
8編5号	明治35年11月	466-467	鹿兒島だより		春隆生	
		611-615	上毛新声誌友会の記			
		542-546	田園に於ける修学		梅溪	
9編1号	明治36年1月	196-198	藤清の旗色		河野素雲	
9編2号	明治36年2月	298-299	八面録			
9編4号	明治36年4月	518-519	八面録			

9編6号	明治36年6月	660-668	甘言苦言			
10編5号	明治36年11月	347	八面鋒			
11編1号	明治37年1月	85-88	交友録		大町桂月	
11編2号	明治37年1月	165-171	降魔剣			
11編4号	明治37年3月	401-405	降魔剣			
11編6号	明治37年5月	701	埼玉新声誌友会の記(其一節)			池本奇壽
12編3号	明治38年4月	333-334	読者気焔欄			
12編5号	明治38年5月	574-579	福岡の二新聞紙	福岡日々新聞と九州日報		覆面武士
12編6号	明治38年6月	762-763	読者気焔欄			
13編2号	明治38年8月	186	当座帳			有股養堂
13編3号	明治38年9月	360-361	読者気焔欄			
13編6号	明治38年11月	714	都会研究に就て諸君に望む			銀月
14編2号	明治39年2月	265-268	読者気焔欄	鹿児島便り	山口白嶺	鹿児島
14編3号	明治39年3月	336-339	緩調急調			
14編4号	明治39年4月	468-469	読者気焔欄			
14編6号	明治39年6月	703-704	読者気焔欄			
15編4号	明治39年10月	467-468	論議二則	一 地方青年		潮歌生
15編5号	明治39年11月	573-577	緩調急調			
17編4号	明治40年10月	380-382	地方の友人に興へて中央文壇の近状を報ずるの書			なつぐも生
17編6号	明治40年12月	624	雑誌警見二	ホノホ		
18編4号	明治41年3月	450	緩調急調			
18編5号	明治41年4月	539-541	緩調急調			
18編6号	明治41年5月	602-608	都市生活の文学			
18編7号	明治41年6月	774	地方文壇			
19編3号	明治41年9月	350	地方文壇			
19編4号	明治41年10月	475	地方文壇			
		475-476	地方会報			
19編5号	明治41年11月	591-592	地方文壇			
		592	地方会報			
20編1号	明治42年1月	52-54	地方色と作物	郷土の性癖と郷土の文学	秋田雨雀	
		54-56		地方色と作家		
		56-58		作品の了解と地方色	相馬御風	
		58-59		二家旗と五月繻と村巻	正宗白鳥	
		59-60		地方色と文芸	松原至文	
		61		作家の個性と地方色	徳田秋声	
		161	昨年の地方文壇		小木曾旭晃	
20巻2号	明治42年2月	278-281	緩調急調			
20巻3号	明治42年3月	336-342	中央文壇を警む		厨川白村	
20巻5号	明治42年6月	756-758	厨川白村氏の『中央文壇を警む』を読む		田中藤村	

まず、地方青年が誌面上で、地方の姿をどのように語ったのかを探るために、『文庫』の「地方の読書界」という記事を参照したい。「地方の読書界」では、全国各地に散居する読者が、各地の「読書界」つまり、地域の文化施設（学校、図書館、書店等）や人々の読書傾向（好まれる作家、よく読まれている新聞雑誌）から、土地の歴史に関することまで、雑多な情報を報じるものであった。その連載期間の長さと内容の詳細さから見て、『文庫』における「地方」および「地方」の人々を対象とした記事としては最も代表的なものであると言える。こうした記事の中に、しばしば執筆者である地方在住の読者の郷里、あるいは他の地方、「中央」に対する意識が介在していることは見逃せない。

以下は、その一例である。

僕は九州の首都とも云ふべき、熊城下の、文学に対する、嗜好、趣味、批評眼などが、信州松本地方とか、柏原地方とか、ただしは岐阜とかの読書眼よりも、少しばかり違えると思ひます。…熊本地方では一体に、高等学校、尋常中学の学生とか、豪家の奥様、令嬢たちが、多く読書界を占めて居るんです。…小説類の最もよく捌けるのは、弦斎ものです。

…尋常中学の生徒は：『文庫』は此頃非常な勢で足りない時もある位です：熊本地方は、文章研磨と云ふよりも、寧ろ義務のようになつて居るのです、それなら、文学趣味が発達してるか、と云ふと、左様でもないです。併し、松本地方から見ると、幾分か発達してるだらうと、僕は思ふ（雨汀子「熊本の読書界」『文庫』明治三十二・二・二十）

興味深いのは、熊本の読書界を「信州松本地方とか、柏原地方だとか、ただしは岐阜とかの読書眼よりも、少しばかり違てる」と他の「地方」と序列化して評価したのち、「文学趣味が発達してるか、と云ふと、左様でもない」という「中央」を意識した評価に移行している点にある。ここからは「九州の首都とも云ふべき」熊本人であるという自負と、『文庫』の読者共同体の一員であることから生じた一種の「中央」からのまなざしと言えるのではないか。この記事をうけて、編集部の方十嵐白蓮は、

地方の読書界といふもの、一部の学生を除きては大かた同じ有様なり。彼等はひとしく露伴鷗外を顧みずして弦斎霞亭を歎び、小説よりは講談を好み、文学美術の報道には目を留まらずして艶種にうき身をやつす、我は必ずしも之を憂へねど、思へば文学の行末、まだ心細しといふべし（白蓮）

と発言している。ここで言及されている「一部の学生」とは『文庫』を愛読するような文学に対する意識の高い学生であり、「彼等」とはいわばこうした「中央文壇」に名を連ねる『文庫』等の雑誌によって文学的な啓蒙を受けていない人々であるというふうに取り上げることができる。地方における読書眼の低さを嘆く読者の投稿に対して同調し、現状を悲観する編集部の意向がこうして誌面上で共有されていくことで、「文学青年の勢力圏」たる『文庫』の読者の青年たちの意識もまた醸成されていったと考えられる。このように 誌面上で共有された『文庫』読者としての意識は、いわゆる田舎、都会、どちらを語る状況であるに関わらず見受けられる。以下は、大阪の様子を報じるものである。

当地は人口凡そ五十余万を包容せる大都會で：仲々、發達して居る様ですが、其実は全く反対で、唯広いと云ふ許りで、一般人士に於ける読書眼は誠に低いのです。土地人士の大概は、將校に従事して常に多動なる生活をなし、功利名聞のみ、日夜心を傾けている人たちですから、其境遇上とても、心を自然の風物に寄せて、悠々と読書界に其思いを寄せることが出来ないので：雑誌で一番よく売れるのは、どこも同じ事でせうが、博文館の物で、『太陽』、『少年世界』など：当地にて發行する『よしあし草』、『みをつくし』、『二葉』など云ふ文学雑誌もありますけれども、大抵はある会の機関雑誌で会員に分つ外少しも売れぬ様です。：何分斯る物質的の土地柄ですから、文学などに心を寄する者が誠に僅少で：願くば先鞭者となつて、大に青年文士を鼓吹してこの大都會の風物、人事の中より趣味の啓発すべき経路を探求して、これに文学的の觀察を下して、盛んに清新なる浪花文学を鼓吹して、一日も早く、此六十万人の腦中より俗的觀念を断たしめ、之に代ふるに文学的趣味を注入して、優に浪花文学の旗幟を天下に翻さるゝに至られんことを切に希望致します（菊の舎「大阪」『文庫』明治三十二・三・二十）

このように、各地を評価する際に、その土地の人口や文化の発展の進度によらず、『文庫』読者の視点が持ち込まれている点は注目に値する。また、「地方の読書界」は連載を重ねるごとに、各地の状況を伝える記事の書きぶりが定型化していくのも見逃せない。その「定型化」の過程を伺う資料として脚注に「大阪」「野邊地」「能登の七尾」の状況を報じた記事を掲載する。^{xi}

この「地方の読書界」は明治三十三年五月十五日に刊行された十四卷六号まで連載されていたが、連載が終了した後も、

こうした各地の読書界の状況を報じる投稿は度々「三寸舌」「大弦小弦」「六號活字」といった「誌友交際欄」（以下、これらを総称して「誌友交際欄」とする）において見られた。また、『新声』誌上においても『文庫』のような連載という形ではないものの、たびたび同様の記事が見られる。^x

また、読者が地方の状況に対する不満を誌面にあらわにしている例も見受けられる。以下は、第一章にも登場した河野紫雲から編集部の高須梅溪に宛てた記事である。

梅溪足下：足下は彼の片々たる地方の青年雑誌を見て快しと為すか。余は寧ろ不快に堪へざるなり。：足下は彼の鏗一文の値ひなき地方雑誌の発刊、日に多きを見て尚且つ文壇の慶事と思意し給ふか。：斯る雑誌は啻に地方青年の軽浮なる文学熱を増長せしめて、若実なる研究的精神を衰微せしむるのみならず、却て他の良好なる雑誌の販路を防ぐるものに非ずや（『廓清の旗色』『新声』明治三十六・一）

前章で取り上げた回想録によれば、河野自身も明治三十二年に有志の青年らとともにこうした地方雑誌の刊行を行なっているが、彼の雑誌も、熱しやすく冷めやすい地方青年たちの「軽浮なる文学熱」に振り回された雑誌の一つである。彼の発言の裏側には、こうした経緯や、『新声』において評価された「中央文壇」の「青年文士」としての自覚が関係していると思われる。

また、両誌に共通してみられる「誌友交際欄」の存在も見逃せない。「誌友交際欄」とは、読者が文学全般に関する情報をやり取りする場であり、『文庫』では「三寸舌」「大絃小絃」「六號活字」、『新声』では「落葉籠」「甘言苦言」「八面鋒」といった連載記事がそれに該当する。これらの記事では、複数の読者の投稿が掲示板のような形で掲載されていた。

例えば、『文庫』第十六巻十六号の「三寸舌」では、以下のような記事が掲載されていた。

名古屋で発行する『東海文学』は、菊判に改めて、殆ど大阪の『関西文学』と同じ体裁の雑誌にする計画で、表紙絵は或人を介して、一条成美君に書かせたさうであるが、所謂中京付近の地に、どうか文学趣味を植ゑ付けたいものだ。

このような地方雑誌の紹介の文章につづいて、つぎのような「中央文壇」のゴシップに関する記事が連なっている。

鉄幹と衝突して『明星』と絶縁したる一条成美は、今回紅葉の知遇を蒙りて、硯友派にて発行する或文学雑誌に揮毫

するとか。

それに加え、「中央文壇」の雑誌に関する情報もやり取りされている。

『文藝倶楽部』の『破垣』の発売禁止もいゝがあの位のものを止めるなら、先月の帝国文学に見えた、みをつくしの『ろり火』なども同様の罰に處する価値は十分だらうと思はれる。

以上のように、ひとつの記事の中に「中央文壇」の情報も「地方文壇」の情報も垣根なく列挙されている。こうした記事の配置もまた「中央文壇」と「地方文壇」の平等幻想を讀者に抱かせる装置として働いていたのではないだろうか。

また、地方雑誌『白虹』の主宰入澤涼月はこうした誌友交際欄に対し、以下のような発言をしている。

地方雑誌に六號活字なるものがある、吾輩は六號活字を難する論者で、(目下は)一切書かぬことにして居る、理由は掲載記事の古くなることである、他所は知らず、白虹なんかは発行日より十五日以前に原稿を送る、所が東京あたりは現行の出来上がりし分から順次に送る、故に六月十五日発行の雑誌で六月一日発行分の評を見ることが多い、之に反し地方は反対で五月の記事は六月に出すからして、文界片々等はどうしても東京雑誌とは遅くれる、この理由で実は止めて居る、由来六號活字を書く人には随分判断力と想像が入る

もちろん地方雑誌にも、誌面に『文庫』『新声』の「誌友交際欄」に順ずる記事を設けていた事例はある。しかし、『文庫』『新声』に掲載された「誌友交際欄」はこうした中央誌ならではのメリットを活かしたものであったことが考えられる。

第二節 編集部から読者へ

誌面では前述のような地方の読者による投稿が頻繁に見られた一方で、たびたび雑誌編集陣から地方の読者へ宛てた記事も掲載された。こうした記事からは、「中央」の立場から地方の読者を鼓舞し感化しようとする思惑を読み取ることができる。

例えば、『文庫』二十四卷五号（明治三十六年十一月十五日）の「田舎の青年と都会」という記事では、

夫れ這般の無知、這般の没道徳境にあり、猶頑陋（がんろう）なる田舎父兄は、其子女を秘蔵すること、偏に十襲の燕石の如く、以て其子を人たらしむるの地を獲たりとなす乎。：首都腐敗せりとや、去らば田舎亦腐敗せる也、首都は清濁併せ呑む者なるも、田舎に至りては、即ち其清めるを吞まずして、徒らにその濁れる者のみを承けたる也。知らず其孰れか可なるを。：田舎の父老が所謂「腐敗」なる者を懼れて、青年を東都に出したがらぬと、学問を無視して、これを青年に禁過すると、自らこれ別問題に属す、前者は即ち惑へるもまた太しき者、後者に至りては、吾人頗る同情に堪へざるものなくんば非ず

と、田舎に暮らす読者の青年たちの父母がもつ都市への偏見と、彼らの都市へのまなざしにはらむ矛盾を指摘し、読者の青年たちが東京において遊学することを推奨している。

次にとりあげる『新声』八編六号（明治三十五年十二月）の「田園に於ける修学」は高須梅溪によって書かれたが、この記事では、あくまで東京で修学することを推奨する立場でありながらも、地方青年の境遇に共感し同情を寄せている。

吾人は絶対的に田園に於ける修学を理なりとするものに非ず能ふべくんば、東都に來りて最高の学府に学び、若くは高等中学程度の専門学校に入りて、各自得意とする所の學術を研鑽するを最上の策なりとせむ：遊学の重要な關係あるは勿論の事なれども、更らに父母に対する情義を回顧せん乎、前者は必然的の義務に非ずして、後者は必然的に遂行せざるべからざるの義務也：後者の義務を遂行するところに最高最純の善美を實現し、合せて吾人の良心に大なる快味を與へらるゝことを知らずや、而して人生生活の眞意義はこれによつて其一部を實現せられ得ることを知らずや

この記事は、五頁にわたって人生における義務として父母に対する情義を全うすることや、精神修養のために誘惑の少ない田舎において学問をする利点を唱えている。梅溪のこの記事には、日露戦争前夜の家族的・共同体的社会結合が緩み始めた当時の社会において、旧来的な家族主義的あるいは封建的な思想を青年たちに呼びかけているのが特徴的である。

また、この記事をうけて、『新声』九編二号（明治三十六年二月）の「八面鋒」に以下のような読者の投稿が見られたのも見逃せない。

前々号に於る梅溪子の「田園に於ける修学なる一論文は、所謂世の情義的事情に束縛せられて、止むなく来艱（こきよ）を取り居る田舎の青年に、慥（たしか）に一導の光明を與へられたる者である。自分は此一文を再読三読して、いつもながら同情の念厚き梅溪子の意を感謝する者である。（羽前、斎藤美笑）

この記事が本当に読者の投稿として掲載されたのか、編集部自作自演であるかはわからないが、こうした記事が採用され誌面に掲載されたという事実によって、ここに描かれた地方読者のすがたを先述の梅溪の記事の理想的な受容として想定していた編集部の意思をうかがうことができる。

『文庫』『新声』両誌が地方青年から支持され、彼らを「文学青年の勢力圏」として包括し得たのは、地方に生きる彼らに「中央」からの感化を与えたとともに、彼らの境遇に寄り添い勇気づけようとする編集部のごうした姿勢に裏付けられた、編集部や全国各地に散居する地方の読者との一体感があったためではないか。そして、両誌は「地方文壇」や地方の状況、読者を記者が誌面上で批判し、時に激励し、あるいは全国各地の地方の読者が「中央」の目線で地方を語る空間を作り出すことによって、相対的に地方の読者にとっての「中央」を具現化させていったと考えられるのではないだろうか。

しかし同時に、このために文壇における両誌の立ち位置は、新人教育の立場をとっていたことから当然と言えそうだが、いくら地方青年たちにとっての「中央文壇」を実現しようと、当時流通していた『新小説』『太陽』などの文芸誌と比較するとどうしてもアマチュア色が強くなってしまふことになった。

また、『新声』十八編六号（明治四十一・五）の「都市生活の文学」では、「都市生活」と「田園生活」の差異に着目しつつも、「都市生活」の目線では「田園生活」の文学は発達しないと言う観点から、地方読者の作品において「田園生活」の目線での「地方的特色」の發揮を期待する内容である。

都市生活の目的：其の最も共通なる点を挙げれば経済上生活の易きに帰するや…これを田園生活に比すれば田園生活が徹頭徹尾生産的ならざるべからざるに反して都会の生活は価値に繋るの生活なり、必ずしも生産的なるを要せず：即ち社会が個人の価値を認識するに至ればそれに伴ふ自らなる生活を営み得るが故なり

まず、以上のように都市生活と田園生活を比較し、都市生活の「即ち社会が個人の価値を認識するに至ればそれに伴ふ自

らなる生活を営み得る」という側面を、文芸活動に必要な要素として紹介している。その反面、以下のように田園生活において文学活動を行う読者を後押ししている。

文芸の人田園の風光を愛してこれを賛美し憧憬して田園生活を唱導する人ありと雖も正き意味に於て田園生活の実行は到底是を許さず、よし田園に生活するとてもその生活を支ふるの富はこれを都市に求めざるべからず、田園の閑居におけるその作に係る作物と雖もこの価値を直截（ちよくせつ）に表明するものは都市がその創作に対するの経済的交換を以て先づ初められざるべからざるは当今の時勢ならずや：：：：：今日の文学が都市の文学にして田園の文学にあらざるの理由は種々あるべし：：：：：需要供給の交換より生ずる経済的価値の増加が都市にあらざれば不可能なることにあるべし、これを以て田園の文学も猶且つ都市の生活より見たる田園の生活と化するの止むなき：：：吾人は田園に生活し眞に田園を愛するの文学者が田園生活のこゝろもかたちの上に表現して、地方的特色の文学が生ぜんことを望む

両誌に掲載された編集陣による記事の内容自体は、書き手によって、いわゆる地方の読者の「田園生活」に肯定的であったり否定的であったりと立場は異なっている。しかしいずれにせよ、地方の読者はこうした記事によって目前に示される「都市生活」と自らの境遇とのほさまに立たされ、自身の生活を「都市生活」の目線で捉え直すことを余儀なくされたのである。それでは、自分たちの実際生活、つまり「田園生活」のなかで「都市生活の文学」に意識的になった地方の読者はこうした事態をどのように受け止め、自らの郷里における文学活動を行なったのだろうか。

第三節 「地方文壇」

誌面によると、地方における雑誌、新聞、書籍の出版や、文学に関係した人々のコミュニティを総括して「地方文壇」と呼称している事例が多く見受けられる。明治三十年ごろから断片的にこうした地方の出版事情や地域の文学会の活動、全国各地で開催された誌友会等に関する投稿は見られる。

小木曾旭晃の『地方文芸史』によれば、地方における文芸雑誌の刊行が全盛期となるのは明治三十三〜三十五年ごろから日露戦争前夜にかけてである。しかし、『文庫』『新声』誌面においてしきりに「地方文壇」という言葉が見受けられるようになるのは、「地方文壇」が成熟期を迎える日露戦後である。そして、大体明治四十年代を中心に、「地方文壇」は誌面上で、地方雑誌の刊行を中心とした活動を指し示す言葉であると同時に、「中央文壇」への対抗意識を兼ね備えた言葉として使用されるという側面が強まった。

たとえば、明治四十一年ごろから始まった『新声』の「地方文壇」という連載では、ほぼ毎回にわたり地方で刊行される文芸雑誌が話題に上った。また、明治末期には『文庫』『新声』両誌において、「地方文壇」の状況を報じる読者の投稿が見られるようになった。こうした投稿もほぼすべてにおいて各地の地方雑誌の編集や掲載作品、主宰者について言及している。以下は、こうした「地方文壇」関連記事のなかでも、代表的なものを取り上げる。まずは、『文庫』三十五卷三号（明治四十・十・十五）の薩摩隼人「近時の地方文壇」である。投稿者の詳細は不明だが、地方雑誌『山鳩』の主宰者であった小木曾旭晃の著書『地方文芸史』において全文が取り上げられていることから、小木曾か彼の周辺の人物である可能性が高いと考えられる。したがって今回は小木曾が執筆したものととしてこの記事を読み解いていくこととする。

物質的の方面より見れば地方文壇は日進月歩の発達を呈しつゝあるものだが、さてその内実の点から見れば乍遺憾物質的進歩に伴はない：我々の最も不快に思ふのは、地方雑誌中往々東都の雑誌をどこまでも模倣し、雑誌の立派なる点だけでなく東都雑誌を凌駕して、世間に名を知られたいと云ふ、柄になき野心である：多少の主義や抱負がなくては雑誌としての価値がどこにあらう、少なくとも地方雑誌は地方雑誌としての意義と特色がなくては駄目である。今日の地方雑誌と云へば、…物質的に出来て誇りとすべきものを求めたならば、堺の『ホノホ』佐賀の『野の花』などがそれで、内容の堅実と地方的特色を發揮するに力めてゐるものは、岐阜の『山鳩』と岡山の『白虹』を推さねばなるまい。…近時の地方文壇は僅か二三の雑誌によつて代表せられてゐる：第一地方文士として相当の実力ある氏の多寡と、其の活動如何によるものであるから、百の主義なく特色なき雑誌よりも、一つの主義あり特色ある雑誌に若くはない

第三章で詳しく考察するが、小木曾は生粋の地方文士による「地方文壇」を「中央文壇」と同等の影響力のある全国的な

ネットワークにしようとする野心を持っていた。つまり、自らの雑誌の所属する「地方文壇」を『文庫』『新声』等の雑誌と同等の影響力を持たせようと目論んでいたことになる。ここで「往々東都の雑誌をどこまでも模倣し、雑誌の立派なる点だけでなく東都雑誌を凌駕して、世間に名を知られたい」という姿勢の地方雑誌を批判しているところから、「中央文壇」の雑誌と差別化を図ることで、「地方文壇」および地方雑誌の独自性を守ろうとしている様子うかがえる。しかしそれと同時に、小木曾は、地方文士の全国的なネットワークに参入せず、一つの地方の文士のみによって作られた地方雑誌にも「郷土雑誌」であって地方雑誌では無いと批判的な姿勢をとっている。以上の記事の続編にあたる『文庫』三十六卷二号（明治四十一年一月十五日）薩摩隼人「近時の地方文壇」の記述では、地方雑誌に寄稿する「中央文壇」の文士への不満うかがえる。

地方文壇は地方文士Ⅱ3東都文士Ⅱ7：即ち七分は党と作家が地方文壇へ遠征して居る：生粋の地方文士は僅か二分よりない：文壇の勝敗は一に作物の優れる如何にあるのだから作家の多寡を以て論ずべきでないのは勿論、東都作家の態度は全力傾注でなく良い加減のものが多く、甚だしきに至つては無責任極まるものがある、これに反して地方作家は地方文壇そのものが、既に本来の活舞台であるから真面目になつて活動する、それ故往々にして地方雑誌中にも東都作家を凌駕してシツカリした作物を見ること珍らしくない、けれども哉惜地方僻偏僻から東都文壇では冷然として見向きもしてくれぬ

前述の地方雑誌『山鳩』主宰の小木曾旭晃編著『地方文芸史』における記述によれば、地方における雑誌刊行のピークはだいたい明治三十四、五年頃と考えられ、この記事が掲載された明治四十年代は「地方文壇」の流行じたいは下火になっていた。

こうした時期に「中央文壇」の雑誌である『文庫』『新声』において頻りに「地方文壇」を謳ったこれらの記事が掲載されたこと背景には、明治四十年代に入り、誌友交際を経て「青年の友」となった文学青年による文芸投書雑誌ブームが、まさに斜陽を迎えつつあったという宮崎^三の指摘があるように、最後の生き残りをかけて、つねに不遇の立場に立たされがちな地方の文学活動に脚光を浴びせて地方の読者の心を繋ぎとめようという思惑があったことには間違いないだろう。それに加え、『文庫』『新声』のような主力な文芸投書雑誌の流行を追い風に各地で生まれた地方雑誌による「地方文壇」も同じよ

うに衰退の一途をたどっていたことや、各地で雑誌刊行が相次ぎ隆盛を極めた三十年代中盤から月日が経過し、主力な雑誌の分布図が明確になったことも関係しているだろう。

また、こうした「地方文壇」を報じる記事の掲載は地方の読者を少なからず喜ばせたようだ。たとえば、『文庫』三十五巻四号（明治四十・十一・三）の松田子琴「地方文壇について」は、そんな「地方文壇」に心を寄せる読者からの投稿である。

小生の欣喜雀躍に堪へざるものは、地方文壇に関する記事の掲載されあることに候。小生は名もなき田園の小草に候が、地方文壇に就いては小生の一生をこれに費やすとも惜しまざる一人に御座候、∴地方文壇は学力においても識見においても中央文壇に比較する事かなはず候が、例へ幼稚なりとも云ふに足らざるとも、中央文壇が之を稚児あつかひにするは不賛成のことに候、大なる道強き者は、小なるもの弱き者を輔翼するが責任にはあらずや、元より一国の文学は其首都より発するものなれど、今日の時勢を見れば、地方文壇とても馬鹿にならぬは直ちに知れることと存候。∴非常に勉強して他日の貢献を期し居る人も御座候

以上の記事からもわかるように、「地方文壇」の存在は、時として熱しやすく冷めやすい青年たちの文学熱に翻弄されながらも、「名もなき田園」に生きる地方青年たちの「一生をこれに費やすとも惜しまざる」心の拠りどころであるという側面を兼ね備えていた。また、「地方文壇」のもとに全国各地の地方青年が集い、連帯感を強め、共に「中央」と対抗したのである。

第四節 地方雑誌『文壇』にみられる地方意識

第一章、第二章を通じて「地方文壇」「中央文壇」、地方雑誌といった言葉が登場しているが、「地方文壇」の雑誌を地方雑誌と考えるならば、それらの雑誌と「中央文壇」の雑誌に明確な違いはあったのだろうか。また、第二章の一―三節では「中央文壇」の雑誌として『文庫』『新声』にみられる地方の読者や「地方文壇」に関する記事を考察したが、それでは地方

雑誌においてそれらはどのように扱われていたのだろうか。

これらの問題を考察するために、第一章の河野の事例にも登場した、名古屋の地方雑誌『文壇』をとりあげる。この『文壇』という雑誌は地方雑誌でありながら全国的に読者を有し、明治三十二年の時点で四百以上もの支部が存在していたとされており¹³¹、『文庫』や『新声』に投書経験のある地方青年からも「一般の地方青少年の人気者は名古屋の『文壇』であった」（河野紫雲『教育の友：若い頃の思ひ出』「東都文壇の文芸雑誌『新声』『文庫』と兄弟雑誌の称を得るに至った」（小本曾旭晃『地方文芸史』）と評価されている。

ここで問題になってくるのは、こうした全国にまたがる広大な誌友のネットワークを獲得し、数多くの文学青年に読まれていた同誌であるが、それにもかかわらず、評価はあくまで「地方雑誌」であり、『文庫』『新声』のような「中央文壇」の雑誌と同等の評価を得られていないという点である。こうした問題に着目しつつ、『文壇』における地方青年の言論活動を見ていきたい。なお、本節を執筆するにあたって参照した記事は以下の表③に表記する¹³²。

《表③》『文壇』地方読者関連記事

巻号	年月日	ページ数	記事タイトル(大)	投稿者	投稿者の居住地
1号	明治29年9月4日	32	文学社友募集規約		
6号	明治30年1月26日	27	我高座郡少年諸君ニ一言ス	小菅一謙	相州高座郡六会村
		27-28	文壇ヲ読ムテ青年諸子ニ望ム	田島久吉	紀伊串本
18号	明治31年1月15日	33-34	善哉我郷里	TH生	千葉県
20号	明治31年3月15日	26	千葉県と俊傑	木川新	
		27-28	田舎	雲鵬生	
25巻	明治31年8月15日	33	田舎詩人	木村定次郎	岐阜県加茂郡加治田町
26巻	明治31年9月15日	23-24	愛郷心を論ず	大藤久	愛媛県喜多郡
		24-25	恵那郡人ノ奮興ヲ待ツ	伊藤常五郎	岐阜県恵那郡鶴岡村
		25-26	起きよ第四十三支部の快男児	鈴木榮吉	千葉県
28号	明治31年11月15日	38	郷里の友人に復する文	扶桑生	千葉県
30号	明治32年1月15日	29-30	余が村の弊風	上住北辰	和歌山
31号	明治32年2月15日	26-29	日本の實(支部長小伝)		
		29-30	我が郷里読者に望む	清原卯之助	茨城県
32号	明治32年3月15日	25-26	初めて文壇諸君と交を結ぶ	田代資清	鹿児島県始良郡重富町
		37-38	北多摩支部発会式の祝辞	飯田源太郎	東京府北多摩
34号	明治32年5月15日	40	文壇誌上ノ交誼ヲ祈ル	大倉正一	岩手県
35号	明治32年6月15日	28	漫録 田舎の俊才		
		30	自戒録	藤田正次郎	茨城県
39号	明治32年11月25日	38-39	謹告本県青年諸士	藤岡源一	山口
41号	明治32年12月25日	42	文壇誌上に交誼を求む	岡田鯛次郎	上毛碓氷八幡
44号	明治33年4月25日	31-32	敢て親愛なる我千葉県男子に告ぐ	伊藤友作	千葉県市原郡菊間村
		32-33	吾が浅井郡の青年諸子に告ぐ	中川政太郎	滋賀浅井郡
		33-34	東濃少年に檄す	松本禮三郎	岐阜県加茂郡加治田村
45号	明治33年6月8日	26	謹望青年諸君入門	中山三郎	長生郡
46号	明治33年7月8日	33-36	初めて明治文海欄に入る	小川昇	南総

まず、『文壇』において「地方」がどのように語られていたかを、以下の投書を参照しながら考察していく。

古来大英雄大豪傑は、那邊より生ぜしかを見るに、彼の絶世の豪傑ナポレオンはコルシカ島邊僻地より出で、奇世の英雄豊太閤は、尾張曠野人跡稀なる所に生し、鐵木眞は韃靼（だつたん）より、ワシントンはミシッピー（ママ）より、釈迦はヒマラヤの東部より西郷南洲は薩摩の寒村僻地より出でしに非ずや、之れを以て之れを見れば、山紫水明の地、能く偉人傑士を生ずるを知る…豈我総房の地に、山紫水明なしとせんや、既に山紫水明の地あり、偉人傑士出でざるに非ず、見よ、木内宗吾郎の如き、伊能忠敬の如き、皆我総房の地より出でしに非ずや。然るに方今、我総房三國に偉人傑士生ぜざるは何ぞや、之れ我総房男子は、小世界に齷齪（あくせく）し、毫も進取の氣性なく、敢て国家的觀念なきによるか、奮えよ総房の快男子、起きよ三國の活男子（木川新「千葉県と俊傑」『文壇』明治三十一・三・十五）

この投稿からは、自らを地方青年の一人と自認し、その不利をみとめながらも、境遇を偉人のそれになぞらえて奮起しようとする意思を読み取ることができる。「奮えよ」「起きよ」と「総房」の男子たち呼びかけているように、こうした投書の読者に想定されているのは当然「中央」の人々ではなく、自分と同じような境遇（この投書においてはさらに自分と同じ郷里の青年）なのである。それは『文庫』『新声』読者の「中央」を透過した地方読者へのまなざしとは異なり、あくまで全国各地の地方青年が『文壇』を拠点に言葉を交わし、自らの境遇を共有し励ましあっていたにすぎない。

以下の投書では、自らの郷里を「都会」と比較しているものの、例えば地方青年が自らの郷里を「中央」の視点から捉えようとした『文庫』の「地方の読書界」等の記事と比較するならば、「中央」から自分たちの郷里を客観的に評価しようとする意思は感じられず、彼等の言葉の中に登場する「都会人」や「都会」というのはあくまで自分たちの故郷を軸とした比較対象にとどまっている。

我区は大にしては、上総の上位に位し、小にしては千代田村の上位にあり、我が区を大別して東西の二部に分ち、またこれを小別して四となを、曰く宿、曰く邊田、曰く中郷、曰く東とし…実に山間の片田舎なり、然りと雖も土地豊沃にして稲穂能く実る…また邊田には尋常小学校ありて、盛大にして日々呬語（いご）の聲…絶ゆる時なし、他日有為

の人物を陶出する象あり、又弘道会支部ありて、道德大に行はれ学区人民大概ね農業を事とし：区内一般性質朴に信義厚く、都会人に比しては恰も霄壤の差異あり、ア、我が美麗なる区内、同窓の友も此にあり、親愛なる雙親も此にあり、篤実なる訓導も亦此にあり、日夜互いに苦辛娛樂を共にし、此泰平の世に生活を受く何の光栄か之れに如かん、只惜しむらくは耶蘇教の行はるゝ事だ（三三）生「善哉我郷里」『文壇』明治三十一・五・十五

この記事には、郷里に「同窓の友も此にあり、親愛なる雙親も此にあり、篤実なる訓導も亦此にあり」として、その共同体に所属する自分を外部から客観視することはなく、彼らと「日夜互いに苦辛娛樂を共にし、此泰平の世に生活を受く」自らの境遇を受け止めている読者の姿があらわれている。『文庫』で頻りに嘆かれている地方における「読書界」の未発達、「読書眼」の低さといったものは言及されず、あくまで田舎に生きる人々の気性の穏やかさや、地縁血縁のつながりに身を委ねることの心地よさに焦点を当てているのが特徴的である。

また、時に彼らの発言において、読者の地方人としての境遇が、創作におけるアイデンティティとして表出しているのも見逃せない。

以下の二つの投書に共通しているのは、みな自分の「田舎」「郷里」を創作活動や立身出世のための肯定的な側面として受け止めている点である。

都人士口を開ば即ち曰く田舎漢禾朴人士汝井蛙の名を脱せんとせば都門に來れと何ぞ其言の謙ならざるやあゝ都の人よ嘲るを止めよ：文学の隆盛は驚くに堪へたりと雖も人情の点に至ては如何其語少しく酷に過ぐるが如しと雖も余は狡猾の府軽薄の巷と云はんのみ：あゝ田舎なる哉田舎なる哉英気を養ふに於て学を勉むるに於て田舎に如くものあらんや皮膚の塵垢と不浄の精神とを洗はんと欲せば天壽を保たんと欲せば深奥の快樂を得んと欲せば須らく喧騒の都門を去りて山又山川又川の田舎に來れ：田舎は實に天地の樂園也（雲鵬生「田舎」『文壇』明治三十一・三・十五）

田舎詩人の幸福は之を都会の地に求むる能はざるなり新鮮なる空気を呼吸し美味なる麦飯を食す田舎詩人の家庭境遇は實に淡泊なり質素なり彼の都詩人が月を汚樓に賞し花を紅塵の中に眺めて如何なる思想か浮かぶべき田舎の光景は真に愛すべし嗚呼都会の紅塵は厭ふべし來たれ都詩人よ須らく去りて田舎に來たり田舎の愉快を玩味せよ（木村定次郎

「田舎詩人」『文壇』 明治三十一・八・十五)

このように、読者自身が「田舎」人であることを自らの文学活動における利点とみなす視点は地方雑誌の『文壇』ならではある。

もちろん、以上のような「郷里」「田舎」を賛美する投稿のほかにも、こうした自らの境遇における苦悩を他の同じような境遇の青年たちと共有し、互いに交流し励まし合いたいと願う投稿もかなりの頻度でみうけられる。代表的なものとして、以下の二つの投書を参照する。

余は那賀郡の東南隅に蟄居(ちつきよ)せる一徹生にして才なく学なく実に憐憫言ふべからざる厭者なり然れども余積年我が長谷毛原村の弊風を嘆じ親友と相会する毎に談之れに移らざるなし曰く之れを改むるの良策ありやとされども未だ他郷人士に語るの機無し：近頃余の親友西浦留蔵君なるもの余に一雑誌を示して曰くこは是れ文壇てふ雑誌にして実に少年界の良誌なり君一文を投せばやとて：読者諸君希くは茫々読過する無く深く余の意を憫み此の弊を矯正するの策を教誨せられよ余は伏して其期を待つのみ(上住北辰「余が村の弊風」『文壇』三十号 明治三十一・一・十五)余は千葉県南総鶴枝の里に住居する一貧家生否無学無才なる一少年なりき而して満天下の博識英智多福なる青年諸氏よ余が性は元来書を好しが家貧して農家を旨として寒暖をも厭わず農務し一陰の休閒あれば書を校閲す噫々如何にして卑賤なる寒生が当誌の有を知らざるや故に本誌に投稿したる否愛読せし事なし嗚呼誰れか之を救ふの仁人なきか然らざれば一步とも進むこと能はざりしが或る日の事なりき：日頃よりの最信たる某友なりき隅々文芸の談話に及び懐中よりの一の小雑誌を持ち出し余に示しつつ君は読見せし事ありやと余云くなしと即是を受け閱れば文は簡短にして明なりと実に小生等の好雑誌なりき：全国の多才博学なる賢兄諸君の筆を揮て名文玉章を吐露し戦するもあ□又は高論卓説奮撃し勝あり敗あり生暫く見て憾ずる所あり故欣喜雀躍の至りに堪へず余思へらく無二の調子と頼むべき両雑誌なり爰に躍出の念転々禁ずること能はず以後拙文を作り本誌に投稿せんと欲す(中山三郎「謹望青年諸君入門」『文壇』明治三十三・六・八)

こうした投書を行なった読者は共通して、自らを辺境の地に住まう「無学無才」の「一少年」、または「一寒生」と称し、

自分たちは郷里において閉塞感や周囲との差異を感じながら過ごしていたが、『文壇』との出会いによって、こうした境遇や他の地方の青年の存在を自覚し、『文壇』誌面における他の読者の文章に感化され、他の地方の青年との交流を望むようになったことを定型文的に述べるのが定石である。

ここにおいて、文化の発達の度合いにおける不利な境遇として地方をとらえる姿勢が時おり現れはするものの、そのまなざしはあくまで地方人の中でのみ共有されるものとして、「中央」の視点から客観視するというよりは、同じ苦悩を共有しあうという側面が強く現れている。

また、以上の投書が二つとも友人の勧めをきっかけに『文壇』の購読を始めていることに言及していることにも注目したい。ここでは直接的に言及されていないが、こうした経路から青年が『文壇』にアクセスしていることから、支部の存在がその背景に強く影響を及ぼしていたと考えるのが妥当だと思われる。前述のように、『文壇』は全国各地の地方青年を統括したのと同時に、各地方単位での読者共同体である、支部の設立に力を入れた雑誌であった。『文壇』の支部は十名以上の読者を以って設立することができたようだ。当時の文芸投書雑誌は、その中でも営利を得るのが難しかった地方の雑誌においては特に、支部制度を利用し、各支部長を中心に、それぞれの地域において読者を勧誘という形で獲得し、読者数を増加させ勢力拡大を図るという戦略をとる雑誌が多く存在した。『文壇』の「文学社支部奨励会則」の、以下の部分を参照しても、『文壇』は大々的に支部長への優遇策を展開していたことがわかる。

第11条 支部長は誌代を全免するの外左の権限を有するものとす但役員は誌代半減、役員にして功勞なき者は此限りにあらず。

第1項 支部長の依頼に係る広告は隔月五行以内無料広告す

第2項 支部長の肖像は本社と永遠に親交を保たん為巻首に掲げていかなる遠隔の士と雖も堂の元に会見せしむ

第12条 各支部長の博記は大いに天下に鳴らして青年士女の模範とし国家の偉材者を産出するの好資料とす

第13条 吾社は各地支部長の斯道啓発土功勞を表彰する為め左の各項に依り功勞賞牌を發す（『文壇』明治三十一・

十二・十五）

今回確認できた『文壇』の各号においては、ほぼ毎号に渡って、各支部長の肖像と、そして各支部長を紹介・賞賛する「支部長小伝」といったタイトルの記事が掲載されていた。これらの記事は各支部長の親しい人物（当然支部の構成員でもある）が執筆にあたっていたようだ。

この「優遇策」のひとつである「支部長小伝」に記される『文壇』の各支部長の肖像から、『文壇』の地方青年たちの読者層の実態を垣間見ることが出来る。したがって、その具体例として三十一号（明治三十二年二月十五日）の『文壇』に掲載された「支部長小伝」（以下表④）を参照したい。

《表④》『文壇』支部長小伝

記事タイトル	投稿者名	本文
二百七十八支部長像	河野悦衆	君姓は三好名は恒雄時雨園朝湖と號す…明治十四年四月四日愛媛県温泉郡朝美村字味酒に生まる…愛媛県尋常中学校に入り三十年三月同校五級の課程を修業す其間勤学篤行を以て褒状賞品を受領せしと廿二回惜哉一朝家事の支障を以て止むを得ず校を退くの不幸に遇ふ爾来農業に従事し傍ら穂積玄壽氏の門に入り専ら漢籍を修む卅一年七月同氏を扶けて青年学友同志会を創立し大いに青年のために蓋す所あり
文学社第百五十二千葉県支部長小野幸太君の小傳	親友 野口茂一	君は鶴洋散史実堂と稱す明治十三年八月を以て千葉県市原郡鶴舞町に生まる…明治十九年七歳の時郷校内田南校に入学し…二十八年三月同校高等全科を卒業す其の間校内に開設の同志誠明会及學術研究会の會長に選舉されしこと幾度なり…同校卒業郊外生として十八史略日本外史を学習すること年余故ありて退学し家にありて専ら実業を務む明治三十一年市原郡短期養蚕講習所に入り同年三月修得証書を得たり
山崎清次郎君客傳	苦輪海舟人 天窓	…君は弘化二乙巳年を以て東都上野に生る…君が兄瀧之助君又た精義忠烈の士明治元年会津征伐の役遂に王事に殉す此に於て君季たるも之れが為に山崎家を襲ぐ君性勤儉にして能く家政を理し且つ公共の事を謀る故に家財を投じて数々貧者を救ひあるいは学校の新築營繕費等に損金し以て教育の発達を図れり
岩手県第二百六拾九支部長佐藤整治君客傳	同支部員 三浦義英草	君は明治十六年十二月を以て岩手県下膽澤郡相去村に生る資性温厚篤実…明治二十六年三月優等を以て相去尋常小学校を卒業し續きて和賀高等小学校に入り同卅年三月を以て同校を卒業せり君の在校中は品行端正学科勉勵を以て賞を受くる数回卒業後はもっぱら地方文学の増進を企画し青年会を組織
第二百九十八福島県支部長和田長吉君客傳	折笠騰謹	君姓小林名は長吉省齋又磐麓生等と號す明治十六年四月を以て岩代河沼郡日橋村八田二百六十二番邸に生る家富まず資性英敏にして学問を好み…明治二十三年君八歳にして郷校に入り翌年三月一年級を終了し品行端正學術優秀なるを以て本郡より二等賞を賜はる…翌廿五年三月二年級を修業す…翌年三月三年級を修業し成績拔群殊に年中無欠席を以て…賞品を得らる同六月本郡長小学生徒の視学に巡回せらるゝや君抜きんてられで報徳記一部を賜はる同十一月本部小学生徒学力比較試験に於て又もや優等なるに依り第一等の賞品と褒状とを賜はる翌年三月優等を以て尋常全科を卒業し…同校補習科に入り…廿九年補習全科を卒業す…同年九月君か至愛の父は一朝の病に於て遂に不帰の客とならる…君殆ど廢学の止むを得ざるに至しに親族知己の励ます所となり…本年四月同校首席にて卒業せらる…君か将来の目的は軍人にあり故に更に進て中等教育を受けんとせしも資無きを如何せん君之を嘆ずるや久し時に奮会津藩士和田氏に養はるゝ処となり宿志を全ふし同教育を受くるを得らるゝに至れり君本地方の文学の隆盛ならざるを慨し奮て少年国学研究会を創立し推されて之れか會長たり
濱口轍二君の小傳		君は明治十六年一月二十九日紀伊串本町に生れ長じて小学校に入り本年三月高等全科卒業せり君は幼にして度量あり常に少年諸子の不振を嘆き本年四月大日本誌文奨励隊串本町支隊を設置

これらの投書から、『文壇』において支部長を務めた青年たちの多数は、地方において熱心に勉学に励み、文学にも親しみながらも、学問や文学への向上心と実生活のはざまに立たされている青年たちであることがわかる。また、河野紫雲の事例や、三章でとりあげる小木曾旭晃が三誌を愛読していたことを明かしており、誌面に見られる投稿者の名前が三誌で重複していることがしばしば確認できる[※]ことから、購読していた時期こそばらつきがあるものの、『文壇』と『文庫』『新声』の読者層は重なり合っていたことが推察される。また、ここから従来の研究では『文庫』『新声』の主な読者層は旧制中学校卒業程度の青年とされてきたが、この『文壇』支部長を務めた地方青年たちに代表される、「高等科」「尋常科」卒の青年を多く内包していたことが示唆される。

加えて、三誌の読者層が重なり合っていたことが予想されるにもかかわらず、『文庫』『新声』の読者は自らの郷里や他の地方に対して、「中央」を介したまなざしを向けていたのに対し、『文壇』で語られる地方からは、「中央文壇」を介さない地方青年同士の連帯意識が表出していたことも注目すべき点である。

『文壇』は刊行時期が「地方文壇」という言葉が文芸投書雑誌上で認知され、読者の青年たちの間で用いられるようになった三十年代後半よりもやや早いため、誌上における「地方文壇」を拠点とした青年たちの言論活動は見られないが、『文壇』誌上に見られる地方青年の地方意識からくる連帯感こそが「地方文壇」を形成し、様々な地方における雑誌の出版などの文学活動の拠点となった。

第三章では、「地方文壇」に対する地方青年の言及や、そこにおける彼らの活動から、「地方文壇」を拠点に交差したそれぞれの郷里へのまなざしや地方意識について考察していきたい。

第三章 「地方文壇」という問題

第一節 小木曾旭晃と『地方文芸史』

第二章の『文庫』『新声』の地方の読者に関する調査の中で、地方における人々の出版活動や、地方において形成された文学に関する共同体は、しばしば「地方文壇」という言葉で表現されていたことがわかった。また、「地方文壇」という言葉が記事のタイトルに使われ、頻りにその様子が報じられるようになるのはだいたい明治三十年代終盤〜四十年代である。加えて、四十年代に入ると、明治三十七年から地方雑誌の『新文芸（のちの『山鳩』）』の編集を行った小木曾旭晃が『新声』に、同時期の有力地方雑誌としてしばしば『山鳩』と対立した『白虹』の入澤涼月という二人の「地方雑誌」主宰者が『文庫』と『新声』に、こぞって地方文壇の近況を報じる記事を投稿しているのも見逃せない。

こうした、当時の「地方文壇」の成立および変遷を考える際に有用な資料としては、小木曾旭晃『地方文芸史』が挙げられる。第二章第一節では、主にこの『地方文芸史』の記述²¹から、一地方青年からみた『文庫』『新声』の時代の「地方文壇」の歩みを考察していく。

小木曾旭晃（本名・小木曾修二、一八八二〜一九七三）は、岐阜県厚見郡細畑村出身である。小学校時代に全聾となり、小学校中退後は独学で文学を志し、様々な新聞雑誌の投書家、編集者、記者として活躍した。明治三十七年に創刊された『新文芸』を四号から引き継ぎ、翌年から『山鳩』と改題して明治四十二年まで編集に携わった。同年『教育新聞』の編集に従事し、四十三年に「地方文芸史」を刊行した。大正九年に岐阜日日新聞社に入社し、勤続二十八年で編集局長などを歴任した。さらに、図書館の経営や『教育新聞』の発行など、地域の文化振興にも尽力した。彼は、こうした自身の様々な活動を通して、ひとときわ地方における文芸や、「地方文壇」における自身の立場を生涯にわたって意識し、最晩年まで出版活動を続けた。彼の編纂した『地方文芸史』は、当時の地方における文学雑誌や誌友交際の状況を詳細に書き記してある資料として、さまざまな研究において引用されてきた。²²

しかし、『地方文芸史』におけるそれぞれの「地方雑誌」に関する記述が研究対象として扱われてきたのに対し、小木曾という一地方青年のみた「地方文壇」の特異性を明らかにするという観点からはまだきちんと研究がされていない。したがって、本節では、各年代の「地方文壇」の状況をうかがうとともに、小木曾が「地方文壇」という存在をどのように解釈し、利用したかを明らかにする手立てとして、「地方文壇」そのものに対する彼独自の見解や発言にも着目していきたい。以上の点に留意した上で、今改めて彼の著述から、明治三十年代～明治末期にかけての「地方文壇」の様子を振り返ってみたいと思う。

『地方文芸史』において、小木曾はまず「地方文壇」そのものを以下のように表現している。

地方文壇とは東京を除きたる、所謂日本六十余州の文壇を総括したるの稱なり、東京は日本の首都たると共に、…蓋し之れ其土地が地勢上を物質の進歩に伴ふ自然の勢にして、即ち、これに中央文壇の稱ある所以なり。…地方文壇に至るは、由来全然必要乃至存在を認められず…生粋の地方文士に至りては、如何なる天才と雖も、廣く文界に聲名を博すること能わず（第一版 一頁）

また、「中央文壇」については、明治二十七、八年ごろの日清戦役の時代から現れ始めた、以下の雑誌に代表される派閥としてとらえられている。

博文館の『太陽』『文芸倶楽部』、春陽堂『新小説』、金港堂『文芸界』などより、やや下つては『文庫』『新声』『活文壇』『中学世界』『江湖文学』『新著月刊』などより、少し遅れて『帝国文学』、『早稲田文学』『三田文学』『新潮』『文章世界』『秀才文壇』などの総合的文学雑誌及び『明星』『白百合』『スバル』などの高級詩歌雑誌（第二版 四頁）

以上を前提条件とした上で、小木曾の「地方文壇」の状況への記述を年代別に考察していく。まず、日清戦役および明治三十年時点における「地方文壇」についてである。ここでは「特筆以て記すべき事績の無き物足りなさを憾む」という記述が見られ、地方における雑誌出版活動が未だ黎明期にあったことを示唆している。

三十一年になると、「当時地方少年の文学趣味が漸次瀰漫（びまん）して来たことを察知し得べき」として、『よしあし草』に続いて勢力を拡大した名古屋の『文壇』周防の『新文学』、常陸の『青年詞壇（のちに『鳳翔』と改題）』等の雑誌を紹介

している。小木曾は一地方雑誌でありながら全国に多くの読者を有していた『鳳翔』を讃え、同時に当時の地方雑誌のあり方を以下のように批判している。

由来地方の雑誌発行者は終始一小天地に跼蹐（きよくせき）として覇気に乏しく、広く江湖に読者を募集する気概もなく、ただ単に郷土の一小天地に少数なる読者を得て満足してゐる有様は、恰も田舎の小売商人のごとく、井中蛙的で、広く海外に商戦を挑み、奇利を博せんとするが如き雄圖なきは、一小島の国民性にも似て、決して稱すべき事ではない。

当時の地方雑誌発行者は殆んど皆此類で、いかに非営利とはいへ、その多くは読者募集の術を知らず、僅かに同種の地方雑誌に交換予告くらいを以て、少数の同好者を募集せんとするの姑息手段に甘んじつつあった（第二版 十八頁）

こうした発言からも、未だ地方雑誌は販売戦略の未成熟な存在であったことがうかがえるが、彼は地方雑誌にも、中央誌のような全国規模の交流と発展を望んでいたことがわかる。

三十三年になると、いわゆる各地に有力な地方雑誌のコミュニティが萌芽し、「地方文壇」として全国規模のネットワークとして機能する時代が勃興するに至ったようである。

新たに発行せられた地方雑誌は四十数種の多きに及んだ、此数から考へると、当時地方文壇の盛観思ふべしであるが、：其多くは片々たる凡俗の雑誌のみにて、気品で聲価のあるものに乏しかった、ただ僅かに二三の好雑誌あり（昭和）
「好雑誌」として『鳳翔』（筑波）、『青年文庫』（千葉）、『明治文園』（若狭）、『鷺津文学』（埼玉）、『文星』（秋田）、『みの虫』（伊賀）等の地方雑誌を紹介した一方で、全ての雑誌が小木曾の考える「地方文壇」に貢献した地方雑誌ではなかったようである。

その他、京都より『文泉』、大阪より『関西文学』、岡山より『曉鐘』、備中より『櫻洲詞叢』、土佐より『土佐文学』、神戸より『新潮』など幾多の雑誌が現はれたけれども、如上の諸雑誌が広汎な意味の地方文壇に歓迎されなかつたのは、要するにあまりに中央化しすぎて、地方的特色に於いて欠くるところありしが故であろう：地方文壇に対して貢献した点は甚だ少ないやうである（第二版 一二三頁）

と指摘している。ここで言及されている「中央化」というのは前述の「中央文壇」の雑誌の体裁を真似たり、そこで活躍し

ている文士に寄稿を依頼し誌面を飾るなどの手法で読者を獲得しようとした雑誌のことであり、こうした雑誌はいくら「地方」で出版されたものであっても「地方文壇」において貢献したとはいえないと指摘しているのである。しかしその一方で、以下のような記述を残している。

然し中央の作家を多く迎へて紙面を飾り立てたり、或は勢援鼓舞せしめやうとする如きものなかつたことは、地方文壇があくまで地方的特色を失はざらんことに力め、たとへそれが因循姑息であつても、中央化することを喜ばなかつた為で、過去数年間の地方文壇は、地味なる地方文士のみを以て構成せられ、誰れ憚るなき自由の行動を以て各地に割譲し、幼稚にして平凡な時代遅れの文学を樂み、一雑誌を發行すれば、自己が幾許の価値あるやは論外として、直ちに一雑誌の記者を以て自負し、先輩たると後輩たるとを問はず、自己の雑誌への投稿は無遠慮に一々選評し、地方文壇の多くもまた之を当然として黙許し、何等咎むるところなかつた（第二版 一三四頁）

まるで当時の「地方文壇」には前述のような「中央化」した雑誌が存在しなかつたかのような書きぶりである。要するに、この記述はあくまで前述のような「中央化」した「地方雑誌」を除外した「地方文壇」の様子である可能性が高いことがうかがえるため、注意が必要である。

ここから、彼の「地方文壇」および「地方雑誌」の定義はきわめて曖昧な基準の上に成り立っていることがわかる。しかし、こうした定義のゆれじたいも、地方において独学で文学への道を志した小木曾という一地方青年のとらえた「地方文壇」の実態をつかむ手がかりと考え、本稿ではあえて着目することとする。

三十三年に引き続き、三十四年の「地方文壇」は徐々に隆盛を極めつつあつた。

大分傾向が変わつてやや動揺して来た。従来ローカルカラー主義は次第にその特色を動揺の波に洗ひ去られ、中央からの文士は座席狭しと肩を並べて大いに優遇さるるに至つた（第二版 一三五頁）

と、徐々に「中央文壇」の影響が「地方文壇」において色濃く現れ始めているという指摘が見られる一方で、

これを後年の如き極端なほどの崇拜に比すれば、なほ当然どこかに毅然として地方文壇の特色を守つていた態度が判る。例せば東都文士の間に伍して、近藤雲外、石島微山らの如き、生粋の地方文士が実力を以て才筆を競ひ、時には東都

文士の驕慢の鼻を搔きたるが如き快哉なこともあつた、其最もよく現れたるものは、名古屋の『秋水』、越前『初霞』などであらう（第二版 二一五頁）

と、後年の「地方文壇」の様子と比較した評価もしている。

また、名古屋の雑誌『秋水』における記述で、熊本の地方文士近藤（上村）雲外が明治三十四年に『秋水』新年号に出した新体詩「新女神」と沼波瓊音（ぬなみけいおん）「涙の元旦」を比べ、雲外を地方の新勢力として「雲外獨り斬然として群を抜き、東都詩壇を睥睨しつつ万丈の気を吐きたるは、まことに痛快そのものである」と述べている。ここから、小木曾の「中央文壇」への強い対抗心がうかがえる。つまり、彼が「地方文壇」に所属するにあたり、「地方文士」をもつてして「中央文士」を凌駕しようという野心が常にあつたといえるだろう。

小木曾は、まさに全盛を迎えつつあつた三十四年の「地方文壇」をこう振り返っている。

三十四年の地方文壇は、急激的に進歩を促進し来たりて、雑誌と云ひ、作品と云ひ、中央文壇に伍して恥ずかしからざるものが多くなつて来た：地方雑誌の真摯と熱誠なる態度は、漸次東都文士の間にも認識せられ、哀心から援助するもの漸く多きを加へるに至つた、殊に喜ぶべきは当時の地方文壇記者も東都の作家を遇する態度も宜しきを得て、妄りに作家の声明に眩惑する如き愚かなる態度を執らず、よく其作品を鑑識し、実力の競争壇場となしたることは頗る愉快に堪へざるところである（第二版 三十八―三十九頁）

この「中央文壇に伍して恥ずかしからざる」という言葉は前年の近藤雲外をはじめとする「地方文士」の活躍を踏まえたものだろう。こうした記述からも、「地方文壇」は数々の雑誌や青年たちの熱意に支えられ、この時まさに全盛時代を迎えようとしていたことがわかる。また小木曾は、当時の地方文壇の状況から、それぞれの「地方雑誌」のもつ「其主義と定見」を大きく二つの潮流として分類している。

一は東都の知名文士を迎へて紙面を飾り、東都の雑誌を模倣し、踏襲せんとするものにして、『夕月』『初霞』の如きは此種に属する、また、一方は眼中ほとんど中央文壇なく、地方文壇在来の郷土主義方針を固執して飽までローカルカラーの發揮に努め、同志の地方文士を以て一団を成せるものがこれである、『玄聲』『櫻洲詞叢』『千代の春』『北陸文学』

の如きは即ち之れに属して居り、『秋水』『曉鐘』の如きは二者の中間にあるものにして、折衷的の主義と定見を持ち、一方にのみ偏せず賞せざるため、勢力扶植の点に於て最も其宜しきを得たものである。随つて二誌の如き其勢力範囲は存外広く、且く永続できたのも、此点に於て興つて力ありしやうである（第二版 三十九頁）

この「東都の雑誌を模倣し、踏襲せんとするもの」と「眼中ほとんど中央文壇なく、地方文壇在来の郷土主義方針を固執して飽までローカルカラーの發揮に努め、同志の地方文士を以て一団を成せるもの」というふたつの潮流へのまなざしは、小木曾と「地方文壇」の関係においてその後もすこしずつ形を変えながら現れている。

続いて、三十五年の記述である。

益々活気を呈するに至つた：有力なる雑誌は競ふて四方に蜂起し、各博手を求め、関係を辿つて、中央文壇の知名作家を迎へ群雄割讓して地方文壇は宛然戦国時代の感がある（第二版 四十―四十一頁）

この記述から、三十四年に引き続きなお全盛期の真つ只中であつた「地方文壇」の様子がうかがえる。しかし、「中央文壇の知名作家を迎へ群雄割讓して」とあるところから、「地方文壇在来の郷土主義方針」をまもつたものはそう多くはなかつたのだろう。

小木曾はこうした状況下で、地方雑誌『千代の春』に「一大雄編」を載せた石島微山を高く評価している。

殊に此誌の如き貧弱な地方の無名雑誌に、惜気もなく斯かる雄篇を寄せたる微山の心意は、たゞ一片の単身友誼に厚きと、微々たる地方文壇に対する一服の興奮剤たらしめんとするに外なかつた。作家の多くが競ふて中央文壇の桧舞台に立たんことを熱望せる吾が文芸界にあつて、斯程の大作を渺たる地方の一小雑誌に寄稿して少しも憾みとせぬ、微山の襟度は感ずべきである（第二版 四十四）

本来「中央文壇」の文士にも引けを取らない作品を、微山が地方雑誌に掲載したことを、「地方文壇」への貢献とし、三十四年に『秋水』において、「中央文壇」の文士である沼波瓊音よりも優れた作品を発表した近藤雲外を「痛快」ととらえていることから、小木曾は「地方文壇」に所属するにあたって（あるいはそれを先導しているという自覚をもつにあたって）、地方在住の文士たちによる、「中央文壇」に引けを取らない強い影響力と全国規模のネットワークを有するものにしたとい

いう野心があったのではないだろうか。また、こうした野心も、当時の全盛期を迎えた「地方文壇」の隆盛や、全国各地における地方雑誌の誕生、それぞれの雑誌を介した「誌友交際」が全国各地の地方青年を結びつけていたという時勢が、彼にそれを実現可能であるという想像力を与えたのではないだろうか。

『文庫』『新声』『文壇』のような雑誌を購読していたどの青年にも共通するように、彼らを文芸投書雑誌に夢中にさせた要因は、投書を雑誌に掲載されたいという投書熱があったのと同時に、「誌友交際」による他の青年との交流があったためである。小木曾はそのなかでも熱心に「誌友交際」を行なっていたと見え、全国にまたがる広大なネットワークを有していたようだ。実際、『地方文芸史』に掲載されていた地方雑誌の数は一七七件にもほり、地域は北海道から九州、台湾までかなりの広範囲を網羅していた^{xviii}。

彼はこうした「誌友交際」によって彼の生涯にわたる出版活動における無二の友を得たようである。青少年期に文芸投書雑誌で投書を行う中で交友を深めた仲間たちが、たびたび彼の刊行物に寄稿している様子をうかがうことができる。こうした友人の中でも、埼玉の河野紫雲、石島微山、熊本の近藤雲外らは小木曾が最も親愛の情を暖めた青年たちであったようである^{xix}。小木曾の「地方文壇」への愛着はこうした全国各地の地方青年との「誌友交際」に裏付けられたものでもあったのだ。

三十六年になると、

稍（やや）沈静を見るに至つた：前年：健闘した有力な書雑誌も、大方労れたと見えて、此年に至り相前後して消息を絶つに至つた、以て地方雑誌の新陳代謝の急なるかがわかる：もとより種々の原因がありとするも、帰するところの多くは、：経費の欠乏と、発行者の熱が冷却するに他ならざるものである（第二版 五十九―六十頁）

と、前年までの勢いがやや停滞しつつあったのがうかがえる。この状況は、「地方雑誌」の運営がほとんど利益を生み出すことなく、ほとんどの雑誌が主宰者の身銭を切って経営されていたために、存続するには並々ならぬ経営者の情熱を必要としたことによるものであるのと同様に、日露戦争の幕開けとも無関係ではなかったようである。^{xx}

また、明治三十七年の、文学青年たちの熱意の冷却と戦時下の閉塞感のもとで、小木曾が編集を努めた『新文芸』（のちの

『山鳩』が発刊されたのであった。また、戦局に翻弄された「地方文壇」であるが、戦後の三十九年においても、戦後の復興と「中央文壇」の自然主義文学の勃興によって新たな局面を迎えるのであった。以下は、明治三十九年の記述である。

戦勝の余光はあらゆる事業の勃興を促し、国力の膨張は百事百芸の発展進歩を促して来た。中央文壇の如きは：急激の進化を呈し、海外文学研究熱は、やがて自然主義思想の勃興を見るに至った。何時までも鎖国主義たるを許さぬこととなつた地方文壇は、時勢の推移に伴ふて急激の変化を示して来た、即ち昔日の誇りとしてゐた一種の地方的特色は漸次に褪せ行かんとして来たのは、一面から見れば進歩的で、賀すべき如くであるが、又惜しむべきものでもあつた、それは即ち中央と地方との特色が次第に薄れゆきて、二者同色に接近せんとしつつあることは、やがて地方文壇の特色と存在を失ふものであるからだ（第二版 百十四～百十五頁）

こうした日露戦後の「戦勝の余光」による社会の発展は、日清戦争と日露戦争という大きな二つの戦争にはさまれた明治三十年代を中心に隆盛を極めた文芸投書雑誌の流行に少なからず影響を与えたようである。そもそも、『文庫』『新声』等の「中央」メディアとしての文芸投書雑誌の流通は明治十五～十八年ごろにかけての全国的な郵便ネットワークの基盤整備や、鉄道の開通とともに実現可能となつた。また、鉄道は、明治二十五年から明治四十年のあいだに、鉄道は営業キロが約二・五倍、旅客輸送量は五倍、貨物輸送量は十倍に増加している。²² 鉄道は日露戦後に国有化され、紡績部門を中心とする軽工業産業から、製鉄・製鋼部門を中心とする重工業産業へと発展した当時の日本の産業基盤となつた。

インフラ・運送業面による全国ネットワークが全国的に構築されてきた日露戦後の背景に鑑みれば、『文庫』『新声』が可能にした「誌友交際」による地方青年の全国的なネットワークは、当時の青年たちにとって新時代の幕開けとともに現れた新しい交友関係のありかたであり、青年たちの投書熱と相互関連し合うかたちで歓迎された。しかし、日露戦争の終戦とともに「中央」と地方はより広範囲な交通網によるリアルタイム性によって結ばれることとなつた。加えて、各地方の郷党意識は地方改良運動をはじめとした国家統合の波とともに薄れていった。²³

四十年に入ると、さらに「地方文壇」は衰退の一途をたどり、「雑誌の廃刊、作家の引退ともに相次いで頻々たるものがある」（頁百二十九）と言及されている。

この年は主に「郷土雑誌」に成り果てた『白虹』と、「中央化」した『野の花』『ホノホ』を取り上げている。この時期に『文庫』『新声』誌面にみられる「地方文壇」関連記事においても、しばしば『白虹』『山鳩』『ホノホ』『野の花』の四誌は有力な地方雑誌としてしばしば取り上げられ、大体的場合、この四誌の話題で持ちきりである。これらの雑誌が長年「地方文壇」において貢献してきたことに加え、すでに斜陽を迎えつつあったこの時期の「地方文壇」において、主力な雑誌の分佈図が全盛期の頃に比べ明確になっていくことがその要因であると考えられる。

また、三十四年の時点で小木曾は地方雑誌を、「東都の雑誌を模倣し、踏襲せんとするもの」と「眼中ほとんど中央文壇なく、地方文壇在来の郷土主義方針を固執して飽までローカルカラーの發揮に努め、同志の地方文士を以て一団を成せるもの」という基準で分類していたが、この時期の記述になると、彼の「郷土主義」へのまなざしの特異性が浮き彫りになってくる。特に、『白虹』への記述からは、郷土の人々からの評価を重視するあまり、他地方の人々との交流が活発でなかった雑誌への不満を読み取ることができる。

雑誌経営上の一方便として、郷土のみの文芸に重きを置くことは一の良策に相違ないが、広義な地方文壇に対しては殆ど没交渉である、随つて読者を多方面に得ることが出来ぬ。例へば岡山のみの狭い郷土雑誌となった『白虹』が、最も力瘤を入れた岡山学生界の記事の如き、岡山人士にとりては多少の興味を感じるであらうが、他府県人士にとりては何らの興味を感じない、随つてその雑誌が岡山の人士には重視せらるるに至ることは、理の当然として免がるべからざるところである、だから『白虹』が復活して、努力した割合に、文壇に声価を博し得なかつたのは亦怪むに足らない、されど郷土文学の鼓吹は、その地方のために、まことに結構であるが、ただその内容を選ぶことが最も肝要である（第二版 百四十一頁）

また、前年も批判していた『野の花』『ホノホ』においては、以下のように言及している。

佐賀の『野の花』は、本年に入つても依然として粉飾の装ひを凝らし、益々中央文壇に接近せんと力めた、此誌の態度は『ホノホ』と好一对：主幹の中尾紫川は中央歌壇の陣笠作家としてやや其名を知られてゐたが、『白虹』の涼月、『ホノホ』の霞洲等に比して、雑誌を作るの技は遙かに及ばない、加ふるに当年の九州には名ある青年作家に乏しく、漸く

中央文壇の一二流作家を迎へて紙面を粉飾し、皮相的の好評を博せんとしたのである：『ホノホ』は本年に入つて内容外観ともに、益々完備を見るに至つた、ただ地方的特色の發揮を閑却せるの一事は、此誌の最も大なる欠点と云へば欠点である（第二版 百四十二―百四十三頁）

これらの記述において取り上げられている雑誌はどれも小木曾の経営していた『山鳩』と同時期に刊行されていた雑誌であり、当然この発言の背景には少なからず当時の「地方文壇」における競合意識が存在し、それが彼の批判的な姿勢を強めていることは否めない。

しかし、彼にとつての理想的な地方雑誌とは、「中央」つまり東京以外の地方から刊行された雑誌という広義の意味ではなく、「中央文壇」の雑誌を模倣したり、その文士たちの寄稿を歓迎するような「中央化」した雑誌でもなく、それでいながら一地方の文士によつて作られ、広く他県の文士を迎え入れなかつた雑誌に対しては「狭い郷土雑誌」であつて彼の理想とする地方雑誌ではないのである。

四十年以降、これらの有力雑誌も相次いで廃刊し、『地方文芸史』第一版は『山鳩』が終刊した明治四十三年で記述が終つている。また、時を同じくして『文庫』『新声』等の「中央文壇」を代表する文芸投書雑誌も相次いで倒れ、投書青年によつて支えられてきた文芸投書雑誌の時代は明治の末期とともに終焉を迎えた。

最後に、補足として小木曾の俳壇と「地方文壇」の關係に言及している以下の記述を取り上げたい。

由来地方文芸と云へば、世人悉くこれを広義に解釈して全ての文芸を一括したる代名詞のごとく思惟したれども、…俳界の分子亦他分子を伍するを好まずして自ら地方文壇と稱し、城郭を設けて悠然高居、脱俗的態度を喜べるもの々如し、…地方文壇は永久に俳壇を隔離するの運命を形成したるなり（第一版 五十六頁）

従来の文芸投書雑誌研究において、投書雑誌の流行の根底には編集者と読者の關係性が非常に密接であるという「歌壇的、俳壇的な結社の伝統」がある（田中保隆「新声・新潮」一一）とする見解があるが、小木曾のこの記述からは相反した印象を受ける。しかし、実際にそれぞれの地方雑誌が各々の地域で文壇を形成し、「地方文壇」における派閥を競い合つてきたことから、かつての歌壇、俳壇的な伝統とは無關係ではなかつたと言える。彼のこうした発言の裏側には、「地方文壇」をあ

くまで異なる地方の文士同士の交流ありきの共同体と考えていた野心的な彼の態度があり、従来の歌壇俳壇そのものというよりは、他地方の文士やジャンルの垣根を越えた交流を行わない排他的な態度に対する反感があったと考えられる。

第二節 入澤涼月と小木曾旭晃の「地方文壇」観

第一節においては「地方文壇」の変遷を小木曾の『地方文芸史』の著述を中心に追ったが、そこで小木曾は「誌友交際」によって実現された全国にまたがる地方青年のネットワークを統括し、「中央文壇」の影響を受けない地方文士による文壇を作ることを目指していたことが推察された。

東都の雑誌に煽て上げられて何時までも小供扱否寧ろ虐待？せられて居るのがどれだけ名誉であるか、寧ろ自由の楽園
‖ 共和主義の地方文壇に思ふがまま大氣焰を吐いて縦んば自惚にせよ地方文士の心意気を示した方がどれだけ愉快か
知れない（「地方文士の補欠難」『山鳩』五十二号 刊行年月日不明）

しかし、「中央文壇」を模倣した雑誌や、一地方の文士にしか開かれていない「郷土雑誌」など、多くの地方雑誌が小木曾の求めている「地方文壇」の雑誌に該当しなかったように、そもそも「地方文壇」という言葉の指し示す範囲やその目的などの捉えかたは、そこに所属すると自負する青年ら各々によって異なっていた。こうした「地方文壇」の他の文士たちは、小木曾の提唱する「地方文壇協力一致説」¹⁾をどのように受け止めていたのだろうか。また、他の文士は「地方文壇」をどのような存在として捉えて居たのだろうか。これらを探るために、第二節では、地方雑誌『山鳩』主宰者としての小木曾と、『山鳩』の長年の論敵であった『白虹』の主宰入澤涼月の関係性から、それぞれのまなざした「地方文壇」を考察していきたい。

まずは小木曾の『山鳩』における『白虹』批判を取り上げたい。

二 中国文壇 …思ふに中国人士は妄りに一時的な大活動を夢みて之れに焦心し、更に遠大悠久の計を執らざるにあり、

創業の易きを知つて、守成の難きを予期せざるにあり、『白虹』の如き『暁星』の如き皆然り、常に内容に外容に東都を模倣し、奇羅錦縷の装を凝して華々しく出て、声価一時に文壇に喧しと雖も、徒に一時振はんとせし結果、慎重を欠き、用意を欠きたれば胸中何等の書策なく、一敗地に塗るるや亦再び起つの勇氣と資料なし、昨の盛装は恰も今日の死出の旅路を飾る用具に過ぎざるの観なくんばあらず」（『地方文壇の回顧』『山鳩』明治三十九・四？）

明石の報告によれば、『白虹』は、主宰の入澤の郷里岡山に強い地盤を持ち、地縁によつてむすびついた文士の連携が強かつたことや、相馬御風など「中央文壇」の文士が協力者として刊行初期から関係していたこと、『文庫』を一つの拠点として文庫派の文士と密接な関係を保っていたことが指摘されている。そこから、「中央文壇」と郷里岡山の強固なパイプを築き上げ、郷里に關係する文士を「中央文壇」に送り出そうとする野心がうかがえる。しかし、こうした『白虹』の態度は、生粋の地方文士によつて「地方文壇」を形成し、「中央文壇」に対抗しようとした小木曾の目には不愉快に映つたのだろう。当初の志も半ばにして休刊に追い込まれた『白虹』をここで痛烈に批判している。

また、四十年になって再開した『白虹』は、岡山の学生界の近況や、「岡山文学小史」といった記事の掲載からもわかるように、より郷土とのつながりを意識した内容に転向していくこととなる。一節でも触れたように、小木曾はいわゆる「郷土雑誌」化してしまつた『白虹』に対しても抜かりなく批判している。

「白虹」は岡山に買収されて極小な岡山的となつてしまつて：如斯雑誌は地方雑誌と呼ぶよりも岡山雑誌と呼ぶ方が恰當（こうとう）である、吾々は普通の云ふ地方雑誌とは認めぬのである、地方文壇に貢献せようと思ふなれば偏狭的小天地を舞台とせず、広く全国を舞台として四角八面に活動せねばならぬ（「意義ある雑誌を作れ』『山鳩』五十二号刊行年月日不明）

それでは、以上の小木曾の発言を、入澤はどのように受けとつたのだろうか。

入澤涼月（本名…入沢恕次、一八八四～一九五一年）は、『続・三木露風研究』¹²¹によれば、「播磨の豪族赤松円心の子則祐より出て代々備前藩に仕え池田氏の世臣であつた」入澤家の次男として生まれ、「（父の）糾（ただし）は廢藩置県で士族となり命ぜられて取締組小頭となり後に岡山県岡山区書記となつた。」とある。学歴は岡山関西中学中退とされていること

もある^{xxv}が、『続・三木露風研究』や、実子にあたる入沢泰邦による『血汐、白虹と涼月及び涼月の周辺』では明治三十六年三月二十歳の時に卒業とされている。中学在学中、有本芳水らと血汐会を結成し、『血汐』を発行するも、明治三十六年に父糾が死去したこともあり、経営難等の理由から三十七年一月五号で『血汐』は廃刊となる。しかし、同年十一月に『白虹』を刊行。明治四十二年まで計二十八号まで刊行されたとみられる。^{xxvi}その間、三木露風の『夏姫』の出版などを手がけた。

明石によれば、岡山で誕生した地方雑誌『白虹』の隆盛の背景には、明治三十年代に入っての岡山での近代文学運動の盛り上がりとその根底にあるとされている。『白虹』と同時期の岡山の地方雑誌『暁星』の主宰菱川淡水が十四卷一号（明治三十二年二月一日）の『文庫』『地方の読書界』に、当時の津山を中心とした「読書界」の盛り上りを伝えている。そこから、『山陽新報』の主筆であった長澤別天や明治二十九年ごろに岡山の中学校教師をしていた田岡嶺雲の影響を受けた青年たちが強い文学熱を持っていたことがわかる。特に田岡嶺雲が当地に『青年文』『日本人』の読者を増やし、彼が岡山を去った後も新声社から出版された『嶺雲搖曳（ようえい）』の売れ行きが良いことを指摘している。そのなかで、地方に下ってきた「中央文壇」の著名な人物が及ぼす影響を好意的に受け止めているのは興味深い。

地名の作家が地方へ下ると、其の地方では必ず其の作家の著書、若しくは多少関係のある新聞雑誌などがよく読まれるので、従つて其の地方の読書界をして進歩せしむるものである。だから、地名の作家が地方へ下るのは、直接に間接に余程影響を及ぼすものである

こうしたまなざしは『暁星』、および同郷の地方雑誌『白虹』にも共有されていたと考えられる。

彼の主宰した『暁星』は、もともと旧制津山中学生の回覧雑誌を基とし、正岡子規の弟子の俳人大谷是空の甥の大谷碧雲居等の結成した十六夜会が主体であるが、一卷五号からは『文庫』の投書家で『星光』の津山支部幹事である菱川淡水が主宰となった。明石^{xxvii}の、『暁星』と『白虹』に関する以下の指摘からもわかるように、『暁星』も『白虹』と同様に「中央文壇」の文士と郷里の文士の交流を、地方の「読書界」の発展と、戦略的な「中央文壇」へのパイプとしてとらえていたと読み取ることができる。

同誌の最後となった二巻一号に表紙の目次では「二人が春 尾上紫舟」とあるのが本文では飛泉郎（真下飛泉）の作品

となつてゐる短歌五首がある。…このような看板と内容の違いに『白虹』の存在も関わりあるのではなからうか。津山という土地がらを考えると、郷土の先輩である柴舟の作品を『暁星』が望むのに不思議はない。…丁度その時、『白虹』が準備されていたはずで、中央文壇との関係では『血汐』当時から相馬御風に恃む所は多かつたことも明らかである。そうした御風を介して岡山県出身者ということと特に柴舟の作品を『白虹』に貫うことが交渉されたのではなからうか

こうした両誌の関係性からも、岡山の地方雑誌をめぐるコミュニティ全体を通じて、このように「中央文壇」を好意的に受け止めるまなざしが共有されていたと考えられる。

以上の背景を踏まえ、『山鳩』からの批判に対する『白虹』の入澤の発言を見ていきたい。

まず、『山鳩』からの『白虹』が「郷土雑誌」的であるという批判に対しては、「地方雑誌とはなんぞ（『山鳩』の旭晃子に告ぐ）（『白虹』明治四十二・二）において、地方文壇の特色はあくまで地方趣味の發揮であり、「無暗に地方文壇なる言葉を呼号して中央文壇を真似たる作物ばかり掲載するは、よしや其の作者が地方に居住して居ても地方雑誌と称することは出来ぬ。地方、中央の区別は住居に依て為すべきでない。趣味に依て為すべきである」として、居住地域にとられず全国的なネットワークを有する地方青年の文壇としての「地方文壇」を目論む小木曾の手法を批判している。また、「岡山の雑誌即ち地方雑誌ではないか。岡山趣味あるいは更に広く中国趣味を天下に発表するが即ち岡山に立脚せる地方雑誌の任務ではあるまいか」と、自身の「地方文壇」があくまで岡山という郷里を地盤にしているという態度を示している。xxviii

こうした態度は『山鳩』への批判か否かにかかわらず、『白虹』誌面においてたびたび入澤の主張することとなつてゐる。何を好んで白虹を出すか、…岡山が文学地として、面目を維持せんが為め也、多くの文壇に於ける先輩を出し、多くの秀才作家を出せるわ△岡山としての、根底を守らんが為め也、岡山文学を益々盛んにせんが為め也、発揚せんが為め也、聊かなりとも吾人が宣言の上に、我人の主義主張の上に針の穴程にても岡山文学の為に貢献せんが為めのみ。豈他意あらんや、文学は神聖也、能ふ限りは岡山の為に蓋したきが精神也。（『某氏に答へて岡山文壇を論ず』『白虹』明治四

以上の発言から、『白虹』が岡山という土地に地盤をもつ雑誌であることへの自負と、岡山で生まれた文士の作品や交流を尊重しようとする入澤の意図を読み取ることができる。彼の姿勢は、小木曾の事例と照らし合わせて考えてみれば、地元に関西中学で形成された血汐会の有本芳水や美土路昌一、地元の中学生コミュニティにおける三木露風らとのつながりや、そして兄の入澤昕江、兄の幼なじみである与謝野鉄幹との関係など、郷里において強固に結ばれた友情や、郷里であり、多くの文学者を輩出した岡山への愛着から出発していると考えることができる。

こうした態度は、地方青年の苦悩を共有し合うことで培われた全国的な「誌友交際」ネットワークへの愛着から、「中央文壇」を打倒することを目指した小木曾の反感を買うことは一目瞭然である。一概に「地方文壇」と総称されるに至った当時の地方雑誌を中心としたコミュニティにも、それぞれの地方青年の生い立ちや境遇によって、そこに所属する目的は異なっていたのである。

しかし、興味深いのは、一步地方雑誌を出た『文庫』『新声』における両者の投稿では、双方の「地方文壇」観は異なれど、連帯意識をもって「中央文壇」に「地方文壇」の影響力を誇示しようとするすがたが見受けられることである。

以下は、小木曾の投稿した明治四十二年の『新声』二十編一号「昨年の地方文壇」の抜粋である。彼は前年の「地方文壇」の功績ある雑誌として、『ホノホ』『野の花』『白虹』『山鳩』を掲げている。

雑誌界に四十年より四十一年にかけて始終色彩ある活動を試み、兎に角地方文壇を代表して斯界の注視を曳きしものは次の四雑誌也、曰く堺の『ホノホ』岡山の『白虹』佐賀の『九州文学』（野の花改題）岐阜の『山鳩』これ也、此外に尚数ふれば屈指に堪へずと雖も、何れも主義なく特色なき平凡無価値の駄雑誌のみなり

そのなかで、『白虹』については以下のように言及している。

此誌は地方雑誌中の古き一にして相当の経歴を有し、二三年前は雄姿堂々としての地方文壇の巨擘と称し、中国出身の東都諸文士の援助を得て横行したるもの、而も星移り物変りて如何に時代の変化が急激なりとするも、此誌の如き変化は稀なり、此年に至りて前年来の態度を一変し、在来の広義なる地方主義を変じて、主として岡山の文芸教育に努力せんとし、漸次消極主義に流れ、前半期に於て漸く隔月に発行し後半期は実に一回だに発行せず：今や『白虹』杳として消

息なし、知らず往時の好漢入澤涼月、果たして健在なりや、願くは往年の『白虹』を興して弧城落日の現時の地方文壇を復興せしめよ、而して再び吾人が好敵手として現はれん事を望むや極めて切なり

確かに前述の両誌の対立における小木曾の『白虹』批判の姿勢は反映されているものの、『白虹』を「地方文壇」を担う好敵手と認め、その価値を評価している。しかし、小木曾の呼びかけも虚しく、『白虹』はこの記事の出た翌月に二十八号を刊行し、惜しくもそれをもって廃刊に追い込まれるのであった。

『文庫』の三十五卷三号と三十八卷二号では、入澤が当時の「地方文壇」の状況を報じている。まず、明治四十年の『文庫』三十五卷三号「地方雑誌散見」では、『山鳩』を

地方文壇で一番長い生命を保つて居る雑誌である。明治三十七年一月の創刊で小木曾旭晃氏が主幹である、編集のやり方、文字の配列等一言も挟むべきぬかりもなく、よくよく眼玉が据つて居る、恐らく編集は一番であらう

と、「地方文壇」において功績ある雑誌として、他の箇所では批判しつつも評価している。

また、明治四十一年の『文庫』三十八卷二号「地方文壇雑感」では、以下のような記述が見られる。

生命ある地方雑誌：現時地方雑誌多きが中に生命あるものは唯僅かに山鳩、九州文学、かたばみの三雑誌に止まる。若し地方文壇に小木曾修二氏の如き、熱誠なる人がせめて十人とあつたならば吾等は意を強うするのである。雑誌は経営が第一であるから、以下にその土地に新進の作家が幾人あつたとて駄目である。故に小木曾氏の如き何れの地にあつても山鳩は活動するのである。

前述の小木曾と入澤のやりとりを踏まえた上でこの文章を読めば、小木曾の地方青年による全国ネットワークによる「地方文壇協力一致説」への皮肉が織り込まれていることには間違い無いが、衰退の一途をたどる「地方文壇」の担い手としての小木曾への期待と連帯意識を読み取ることができる。

加えて着目すべきなのは、この記事の冒頭から、衰退の一途をたどりつづける「地方文壇」への入澤の消極的な態度が見受けられることである。

地方文壇の進歩発達てふことに関しては、頗る苦心考究したものであるが、終に吾人は発展の不可能なることを認識し

た。六年前の地方文壇と現今の地方文壇を比較評論するに、時代の趨勢と変化によって幾分の発展ある筈のものが悲しいかな、立証するだけの進歩がないのは吾人の甚だ悲しむ所である

この記事が書かれた時期は『白虹』が廃刊となる明治四十二年二月の二十八号とその直前の四十一年の八月の四巻五号のあいだである。ここから、『白虹』廃刊に近づくにつれ、徐々に誌面にも岡山文壇の振興に努めた入澤の青春時代が、家庭や生活の要請にともなう終焉を迎えようとしている様子が見え始める。

学生時代を去った僕は社会の舞台を汚して居る一員である。俗事は日に日に加はって来た、身は青年界にあるけれども齊し来るものは悲しいかな、次第に地方文壇を去れよと警告する、滔々として混濁なる社会はこの修養なき僕に警鐘を伝へるは正に世の中の定則であることを確信した（「僕の回顧」『白虹』明治四十二・二）

二十八号の以上の記述からも、岡山文壇の再興と実生活とのはざままで煩悶するひとりの青年のすがたが浮かび上がる。二十八号を以って『白虹』は突如廃刊となり、入澤は遠縁にあたる岡山の名士杉山岩三郎の斡旋で京城日報社に奉職することとなった。この一連の出来事を考えたときに、『白虹』三巻四号の以下の記事における彼の発言が想起させられる。

然れども無責任なる雑誌乱発の今日は、地方人士の意気地なきに帰するか、地方は文学新興の地にあらざるか、吾人は一個の自覚を抱いて立つ以上は、岡陵を去らざる迄は、極力文界の不徳義漢の城壁を破壊し、吾人の宿志たる地方文壇の振興を図り、大に語らずして、大に為すあらんとす（「地方雑誌記者を戒む」『白虹』明治四十・八）

従来の研究では、多くの雑誌仲間が「中央」に進出して同人誌を作り、家族の離散によって経済的な支援を打ち切られたことが『白虹』廃刊の直接的な原因であることが指摘されてきた。しかし、ついで「終刊号」と銘打たれることのなかった二十八号が入澤の『白虹』継続の意思と「地方文壇」への未練を示しつつも、「岡陵を去らざる迄」の言葉通りに京城へ向かった彼の足取りからは、徐々に各方面から「地方文壇」からの退場を迫られていることに自覚的とならざるを得なかった事情をうかがうことができる。つまり、『白虹』の突然の廃刊と入澤の「地方文壇」引退については以上の事例に鑑みる必要があるのである。

補節 小木曾の個人史における「地方文壇」の意義

最後に、本稿で取り上げた小木曾旭晃という人物の一地方青年としての特異性に言及したい。もちろん、彼の様々な刊行物における発言は、十年以上もの長きにわたって広範な「誌友交際」ネットワークを保持し、自ら地方雑誌主宰者として「地方文壇」を見つめ続けた人物として、当時の地方青年の思想の一側面を著している。

しかし、文芸投書雑誌の読者として想定されていたのは旧制中学卒業程度の学歴を持つ青年たちであったことは、度々先行研究でも指摘されている。それは『文庫』第一巻第一号の『「文庫」寄稿心得』（明治二十八・八・二十五）において『文庫』は中等教育の程度にある全国小社年の機関雑誌なり」と記されていることから、こうした読者層の青年が想定されていたことがうかがえる^{xix}。この観点から見れば、聴覚障害によって高等小学校中退という学歴という経歴を持つ小木曾のような青年はいわゆるイレギュラー的存在であり、そんな彼が文芸投書雑誌における活動にしばしば「地方」人としての視点を持ち込むに至ったという経緯は看過できない。彼の投書家、地方雑誌主宰者としての時代が、彼の人生全体において俯瞰した際に持つ意味を考察することによって、『地方文芸史』をはじめとする彼の言論活動に著された、当時の地方在住の、所与の事情から高い学歴を取得することが叶わなかった「亜」インテリ層ともいうべき青年における、文芸投書雑誌、あるいは「地方文壇」の意義に輪郭をもたせられると考える。

彼は生涯にわたって数々の刊行物を手がけたが、彼が『山鳩』時代までを過ごした生家は決して裕福ではなかったようだ。彼の自叙伝『逆境に苦闘して』によれば、小木曾家は傘の製造販売、繭問屋、甘藷問屋、織物製造などと度々商売を変えていた。彼の印刷メディアとの出会いは、彼が聴力を失い小学校を中退した後、家業の機織工をするかたわら、書籍や古い雑誌を読むようになったことがきっかけであったと述べられている。その機織工生活の後に、両親の計らいで二年間の岐阜での書生生活を送るも、その後すぐに足袋製造見習いとなることを余儀なくされるなど、青少年期の彼は常に聴覚障害と将来への不安に煩悶しながら、文学や学問への欲求と実生活のはざまに立たされていた。岐阜日日新聞社に入社するまで、数々の地方雑誌や『山鳩』後の『教育新聞』の刊行のうらで、彼はいつも不安定な職業や家庭の事情に苦悩し続けたようだ。

こうした背景に鑑みて、彼の誌面上の言論を振り返ってみれば、彼の執拗なまでの「中央文壇」への反発と、「誌友交際」にむすばれた地方青年のネットワークへの愛着は、どんなに熱意と才能があっても報われない自身の境遇と照らし合わせた、都市生活の、以下のような側面への強い憧れと反感から来ていたと考えられるのではないだろうか。

都会の生活は価値に繋るの生活なり、必ずしも生産的なるを要せず；即ち社会が個人の価値を認識するに至ればそれに伴ふ自らなる生活を営み得るが故なり（「都市生活の文学」『新声』明治四十一・五）

しかし、それと同時に彼は投書雑誌を通じて数多くの地方青年と苦悩を共有し、また地方雑誌の主筆として「地方文壇」へ貢献し続けることによって、そこで培った人脈や文章力が生涯をかけて彼の身を扶けることとなったのである。以上から、ある意味で、対中央のためのすべての地方を統括したコミュニティとしての「地方文壇」に所属することによって、彼は自身の資産や学歴への劣等感を地方対中央の問題として捉えていたと考えられるのではないだろうか。

また、こうした徹底的な地方バイアスと、漢学等の従来の教養文化から自由であることが、彼に地方に生きる人々の潜在的欲求を実感させ、『教育新聞』の発行、岐阜通俗図書館の運営などを行動に移させたのではないだろうか。

小木曾が明治四十二年に発刊した『教育新聞』（一九〇九〜一九四〇）の「発刊の辞」には「趣味教育、家庭教育の改善、地方教育界援護の三大綱領の下に本誌を発刊」とあり、「趣味教育」という言葉からは生涯学習の発想を感じさせる。こうした生涯学習の思想は彼が行なった図書館の運営なども親和性は高いと考えられる。

彼は『教育新聞』における自身の活動を以下のように振り返っている。

教育新聞では若い青少年を懇切に導いたつもりである、たとえば地方の青少年の投書を奨励し、その文章はいかほど拙劣を極めたものでも、懇切丁寧に添削批評し、文章熱を煽つたものである、当時師範や中学の生徒、または地方の青年で教育新聞投書家の常連となり、後年文才を以て知られたり、歌人や俳人となって名を成した人が甚だ多い、それらの諸君は今も私の名を記憶して居らるると共に、投書家時代に私の指導ぶりが懇切で、且つ奨動的であったことも認められていと思う（「私と県教育界 教育文化の表彰を機として」『生活と文化』六十五号 昭和二十七）

この記述にもある通り、小木曾は『教育新聞』によって地域の青少年の文学熱をあおり、多くの青少年から慕われて

いたようだ。終戦直後の昭和二十一年に小木曾が刊行した『地方文化』、その後身雑誌『生活と文化』を見ると、『教育新聞』時代の投稿青年たちが集い、文学活動を行なっていることがうかがえる。^{xxx}

また、投書家時代に育まれた地方文化発展への意識は、彼の生涯にわたる言論活動の軸となっていた。^{xxx}

そもそも、地方出身であったとしても資産や学歴のある青年たちは生涯を通じて郷里に縛られつづける必要はなく、むしろ進学や就職等の機会によって「中央」に組み込まれていく場合も多い。こうしたことから、小木曾が生涯を通じて地方における文化振興を唱え、「中央」に反発し続けた原動力となっていたものが、資産や学歴への劣等感を、雑誌で他の地方青年の苦悩を共有することによって地方対「中央」という枠組みに置き換えたものであったと考えられるのである。したがって、彼は地方に生きる人々にとつての生涯学習の必要性を自覚し、その潜在的な要求を実感することができたのではないだろうか。その上で、『教育新聞』や図書館の運営等で「趣味教育」の発達を目指すことによって、地方における文化資本を生み出す場を作りだそうと試みることはできなかったのではないか。

加えて、彼のこうした地方人としての思想を形成し、地域の人々の潜在的な需要に気づく機会を与えたのは文芸投書雑誌をはじめとする出版メディアとの出会いであると考えられる。実際に、彼は自身の自叙伝において、青年期の知識や教養の形成に、新聞雑誌等のメディアに強く影響を受けたことに言及している^{xxxi}。

よって、小木曾の『地方文芸史』を始めとする、地方在住の投書家として活躍した青年たちが著した資料をとりあげる際、彼らが地方人として郷里の人々や生活とどのように関わってきたかをとらえることで、より明確に「地方文壇」に寄り添い地方人としての生きかたを模索し続けた青年のすがたが浮かび上がるのである。

また、本来ならば、『白虹』の入澤も小木曾と同様に、入澤の個人史における彼と「地方文壇」の関係性を考察すべきであるが、入澤に関連した資料の多くは原爆によって失われており、小木曾の議論に対し、量的に対抗することができなかった。彼の個人史をさぐる手がかりとしては、管見の限りでは、管見の限りでは、入澤の実子にあたる入澤泰邦氏の『血汐、白虹と涼月、及び涼月の周辺』、安倍宙之助『続・三木露風研究』等の資料が挙げられる。しかし、こうした資料からの情報だけでは、小木曾の事例のように、入澤の生涯全体を俯瞰した際における彼の「地方文壇」の意義を見いだせたとはいえなかつ

た。また、小木曾の事例においても、本稿においては以上の事例を指摘することども、小木曾という一地方青年と彼の出版活動全体を俯瞰した研究は今後の課題としたい。

終章

最後に、すべての章を振り返りつつ、あらためて地方の読者が文芸投書雑誌への投稿を介して見つめた「中央」と地方の姿を考察していきたい。

第一章では、地方青年と文芸投書雑誌の関係性を、室生犀星『性に目覚める頃』の記述と、地方の投書青年であった河野紫雲の事例から考察した。そのなかで、『文庫』『新声』が地方青年にとって「中央文壇」にアクセスする貴重な存在であり、それらへ投書するという行為が、彼らの文学への野心を掻き立てるものであると同時に、自らの郷里における名誉を意識させ、同じような境遇を共有する他の投書青年との交流の契機となっていたことがわかった。

第二章では『文庫』『新声』および地方雑誌の『文壇』を対象に地方の読者に関する誌面分析を行った。『文庫』『新声』は地方の読者への同情的な態度や「中央」意識による啓蒙を巧みに織り交ぜ、全国各地に散居する読者に一体感を与えた。地方の読者はしばしば自らの郷里への愛着を表出させつつも、『文庫』『新声』読者としての視点から地方を語った。その一方で、『文壇』は地方青年主体の空間を築き、互いに地方青年としての境遇や思想を共有しあう場として機能していた。

第三章では、「地方文壇」という言葉のもつ、地方の投書家らの「中央文壇」（東都文壇）への対抗心による連帯感を強め、地方における文学活動の拠点としての側面を考察した。しかし、こうして地方青年に連帯感を与えた「地方文壇」であるが、「地方文壇」という言葉の意味合いは地方青年各々によって異なっていた。そこで地方雑誌『山鳩』の主宰小木曾旭晃と『白虹』の主宰入澤涼月の事例をとりあげた。

小木曾旭晃は著書である『地方文芸史』や『山鳩』誌上において、自らの投書家としての活動によって培った広範な「誌友交際」ネットワークに愛着を持ち、全国各地の地方青年および「地方雑誌」を団結させて「地方文壇」に「中央文壇」を凌駕する影響力を持たせようとした。よって、「中央文壇」の雑誌を模倣し、文士の寄稿を歓迎する地方雑誌の態度や、郷里の文人だけの閉鎖的な態度の地方雑誌に強い反感を抱き、誌面において繰り返し痛烈に批判しつづけた。

その一方で、岡山の地方雑誌『白虹』の主宰入澤涼月は、地元の岡山関西中学校の同窓生である有本芳水、美土路昌一や、

地元の中学生コミュニティに所属していた三木露風等の青年たちとの交流を地盤に持ち、こうした郷里岡山の文壇の発展のために、兄の幼馴染である与謝野鉄幹とはじめとする新詩社のコミュニティや、『文庫』派の文人たちなど、「中央文壇」とのつながりを戦略的に利用していた。こうした彼の態度はしばしば小木曾の批判の対象となったが、あくまで「地方文壇」の特色は「地方趣味」の發揮であるという姿勢を毅然と保ち続けた。

しかし、互いの雑誌上では敵対し続けたふたりであるが、『文庫』『新声』誌上においては「地方文壇」に貢献する雑誌として互いの雑誌に言及し合い、一枚岩の「地方文壇」として連帯しようとする意識が見受けられた。

以上の各章の内容をふまえた上で、地方において文芸投書雑誌を購読し投稿を行うという行為が、地方の青年たちのまなざしにもたらしたものをいま一度考えてみたい。

まず、『文庫』『新声』等全国ベースの文芸投書雑誌では、地方の読者はこうした全国誌における活躍からしばしば自身の郷里における名誉や、文壇における立身出世を想起した。誌面における活動を通じた誌面や文通、「誌友会」などの「誌友交際」によって、読者の青年同士、あるいは読者と編集部は「青年の友」としての一体感をもつようになった。こうして形成されたコミュニティにおいて存在感を發揮することが、読者の青年たちの文学への欲求を満たしていた。

同時に、「中央」の立場から地方をみつめる啓蒙的な視点にふれることで、地方に居住しながらも、東京を中心とした全国的なネットワークに組み込まれているといった「文学青年の勢力圏」の一員としての自覚を得ることとなり、誌面上において自分の郷里を客観視し、他の地方と序列化した語りを見せたと推察される。

「誌友交際」は全国各地の青年を結びつけると同時に、地方青年の団結を促し、その結果、いくつもの青年のコミュニティや地方雑誌が誕生した。こうしたコミュニティに集った地方青年の「中央文壇」への対抗心は、記事や雑誌の運営方針などさまざまな観点から表出していた。これが前述の『文庫』『新声』等の全国誌と地方雑誌とを区別する一番の差異であると考えられる。もちろん双方の序列は数々の地方青年の言及からわかるように、当時の青年の意識においてある程度明確に差別化されていたと考えられるが、読者層の重複や当時の垣根のない「誌友交際」ネットワークの複雑さから、両者の区分は曖昧な基準に依らざるを得ず、青年各々によって評価は異なっていた。

つまり、本稿における地方青年の文芸投書雑誌をめぐるまなざしとは、全国誌である『文庫』『新声』をめぐる「中央」視点からの郷里を相対的に評価しようとするまなざしと、郷里と他の地方との序列化となって現れ、地方雑誌および「地方文壇」においては、「誌友交際」による地方青年の全国的なネットワークへの野心と、愛郷心の対立となって現れた。

また、明治三十年代から末期にかけてのこの時期に「地方文壇」が多くの地方青年に支持され、活動の拠点として機能していた背景には、この当時において漸くリアルタイム性と全国的なネットワークを持ち始めた日露戦争前夜の郵便制度やインフラの状況と、地方青年たちのこうした新しい交流のネットワークへの情熱が適合したことが考えられる。したがって、小木曾の指摘にもあるように、日露戦後の国家統合と技術革新の流れによって、しだいに「中央」と地方を差異化した枠組みが薄れていったことが四十年代以降の「地方文壇」の衰退に大きく影響を及ぼしているといえるのではないだろうか。また、入澤の事例からも指摘しうるように、実生活の要請にともない「地方文壇」から退場していった地方青年が他にも存在したことが推測せられ、「地方文壇」の衰退には『文庫』『新声』読者の世代的な問題があったと考えられる。

前述の通り、先行研究において、関が『文庫』のもつコミュニケーション空間が全国各地の読者に共同体意識を芽生えさせたことを指摘し長尾が「誌友交際」による地方青年の団結を指摘したが、本稿は『文庫』『新声』の流行と「地方文壇」の勃興の密接な関連に着目することで、これらの研究の内的関係を明らかにできたと考える。

しかし、本稿で明らかになったのは主に小木曾という一地方青年とその周囲の人物の観測した「地方文壇」の一側面である。したがって、「地方文壇」の勃興から衰退までの一連の流れにおいて一時代の流行としての側面が色濃く表出することとなった。しかし、入澤の事例で確認したように、「地方文壇」をめぐるのは地方雑誌それぞれに主催者の郷里や「誌友交際」ネットワークへの期待が密接に関係しており、より「地方文壇」の定義を一般化し、現代社会へとつながる普遍性をとらえるには、より多くの雑誌を対象とした研究をする必要がある。これらを今後の課題に見据え、本稿を締めくくりたい。

『文庫』は伊良子清白、横瀬夜雨、北原白秋、窪田空穂、三木露風、島木赤彦、『新声』は若山牧水、前田夕暮等を輩出し

た。

永嶺重敏『読書国民』の誕生―明治30年代の活字メディアと読書文化』（日本エディタースクール出版部 二〇〇四年）

島村健司「文壇と投書雑誌と投書家共同体の力学…『文章世界』のなかの横光利一（白歩／左馬）」『國文學論叢』（龍谷大学 二〇〇四年）

宮崎睦之「講義する雑誌、講義する書物―新潮社・明治四十年、投書雑誌のの黄昏にて―」『立教大学日本文学82』（立教大学 一九九〇年）

関肇「文学青年の勢力圏…『文庫』における読むことと書くこと」『新聞小説の時代』（新曜社 二〇〇七年）

室生犀星（一九五二年）「性に眼覚める頃」https://www.azora.gr.jp/cards/001579/files/53012_49683.html 一〇一八年十一月二〇日のアクセス

大本達也『新体詩抄』による日本の「詩」の本流形成／明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論（12）『鈴鹿国際大学紀要』（鈴鹿国際大学 二〇一五年）

前田愛・加藤秀俊『明治メディア考』（河出書房新社 二〇〇八年）

ix

・御承知の如く当地は海濱の一小漁村でありまして、人智未だ開けず、小学校の設けあれども、商家の子弟を除くの外は、尋常小学校を卒業するとすぐ退校して生業に就きます。…中途にして退学するものもある有様です…故に読書眼と云ったら、極低いのです。書籍店とて別ありません、雑貨屋店の一隅で『明治塵却記』、『用文章』、『三世相位萬曆』又は仇討草紙などを売りをります…貧乏なものは、小使錢を節し自分で本を買ふてみるなどと云ふことは、容易ではありません。是非だだをこねて、東京に注文してもらはなければなりません。御役人様方でも商家でも、矢張り東京又は青森より取り寄せて居ります。…『文庫』は私一人と云はれました。当地の読書界と云ふたら、先づこんなもので、少しも進歩しない方です。聖代の今日実に恥入ります（華眠子「野邊地」『文庫』明治三十二・三十三）

・（筆者註…能登の七尾）と、さへ云へば諸君は、ハア三助か、烏賊釣か、など、刎ね付けて仕舞が、…まことに僕は残念であると思ふ。そう見捨てたものでもない、元は六十万石を領し、九世百八十年続きし畠山大納言の城下で、史に『（前略）謙信陥れし後、天正八年長連龍の為に攻められ、終に保つべからざるを知り、之を信長に献ず、九年利家封を

能登に受くるに及び、移りて此に居す、云々』とあり、実に不識庵が『数行過雁月三更、越山并得能州景』と謡つたのも此地なのだ。：此の地に、読書界や文学など、言ふは、そもそも野暮の極みであるのだ。：今特別大書すべきことがある、それは彼の地の青年だ、彼等は日常店先に草履の二三足駄菓子の一箱も併べて、それで口を糊して此の上望むべからざるものを思つて居る。でなくば爺の向脛に嚙り付いて、明笛を吹き月琴を弾き流行の俗歌を唱ふて日を暮らして居る、呑気なものではないか（七轉郎「能登の七尾」『文庫』（明治三十二・八・十五）

× 「鹿兒島だより」(『新声』明治三十五・十一)等が該当

× 地方雑誌『山鳩』の「豆鉄砲」、『白虹』の「竹頭木屑」などが該当する。

× 宮崎睦之「講義する雑誌、講義する書物」新潮社・明治四十年、投書雑誌の『黄昏にて』、『立教大学日本文学』(立教大学一九九〇年)

× 長尾宗典「高山樗牛と「田舎教師」―世紀転換期における「文明」批判の精神―」『社会文化史学』(『社会文化史学会』二〇〇九年)

× 本稿における『文壇』の調査結果は東京大学大学院法学政治学研究科附属明治新聞雑誌文庫所蔵のマイクロフィルム資料に基づいている。したがって、全号をふまえたものではない。なお、『図3』においてとりあげられた記事は地方読者に関連するものであるが、ほぼ毎号において掲載されている各支部の状況や各支部長の小伝は全てを掲載せず、代表的なものに掲載するにとどめた。

× 『文壇』誌上では河野省三がたびたび他の青年と議論を交わす姿が見受けられる（「書優論者呈菱田君」『文壇』明治三十一・三・十五）。また、今回はそのほかに『新声』において金子薫園と議論を交わした鈴木榮吉等が『文壇』誌上で確認できた（「起きよ第四十三支部の快男児」『文壇』明治三十一・九・十五）。他にもこうした事例は多数存在することが推測されるが、今回は詳細な調査は行わなかった。

× 小木曾の『地方文芸史』は明治四十三年に第一版、昭和十四年に第二版が刊行された。本稿において採用した箇所は特に記述内容に目立った差異がなかったことや、引用を行う際の読みやすさから、主に第二版を引用文献として採用した。ただ、冒頭部は直接的に「地方文壇」や「中央文壇」に言及している第一版を採用した。また、歌壇・俳壇文化と「地方文壇」の際に着目した第一版五十六頁の文章も、文章が端的であったために第一版を採用した。第一版と第二版の全体を俯瞰すれば、他にも所々に違いが見受けられるが、それらの比較検討は今後の課題としたい。

・ 太田登『日本近代短歌史の構築』晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄（八木書店二〇〇六年）

・長尾宗典「第1」講：「誌友交際」の思想世界』『近代日本の思想をさぐる…研究のための』の視角』（吉川弘文館二〇一八年）

xviii 小木曾旭晃『地方文芸史』に登場する雑誌の地方別タイトル数

《東北》

小樽二件、秋田四件、羽後一件、越前二件、越中三件、陸奥一件、岩代一件、仙台一件、陸中二件、盛岡一件、福島二件

《関東》

常陸四件、上総二件、下総五件、武蔵四件、相模一件、横浜三件、千葉一件、下野一件、安房二件、甲斐二件

《中部》

名古屋二十二件、信濃七件、若狭二件、伊賀一件、岐阜五件、金沢二件、能登三件、三河二件、加賀一件、尾張七件、駿

河一件、浜松一件、静岡二件

《近畿》

大阪十五件、大和二件、京都四件、神戸二件、播磨二件、但馬二件、紀伊五件、伊勢六件、姫路一件、丹波一件、

《中国》

周防三件、美濃十件、岡山五件、備前一件、備後一件、尾道一件、広島一件、島根一件、鳥取一件

《四国》

丸亀一件、土佐九件、伊予一件、

《九州》

日向二件、熊本三件、佐賀一件、門司一件、福岡一件

《国外》

台湾一件

xix 「当時の地方文士の中、吾々が衷心より畏敬したものは、河野紫雲、近藤雲外、石島微山、奥正四郎の四人である。而して紫雲は俊敏なりと雖も、雄篇大作を成さんとすることは、当時の彼としては得意でなく、寧ろ短編小章の間に其非凡

の英才を見せ、雲外はよく紫雲に追求し微山に迫る力量ありと雖も、やや才を弄しすぎる憾ありしみありしを惜む、正四郎に至りては才氣煥発、能く文壇の時流に投ぜしと雖も、多少衛氣の厭ふべき点なしとせぬ」(小木曾旭晃『地方文芸史』十四頁)

xx 「地方文壇の戦国時代として、空前の旺盛を極めた明治三十六年も暮れそめ、文芸界の戦塵も漸く収まらんとせる末期に至り、日露両国間の不運は次第に険悪となり、此慌しい空気は早くも文芸界に響いて来て、漸く凋落の秋を呈し来らんとした、それは言ふまでもなく国家多難の名の下に文芸を語る者が日に月にその影を潜めて、延いて諸雑誌の廃刊休刊相俟ぐに至つたことである」(小木曾旭晃『地方文芸史』七十九頁)

xxi 山本弘文『交通・運輸の発達と技術革新―歴史的考察』(国際連合大学 一九八六年)

xxii 日露戦後にみられる家族国家観の浸透は、こうした郷党主義や家族主義を利用しながら発展したという側面はあるものの、本論では、日露戦後における「旧来の家族的・共同体的社会結合が緩み始めたことにはたいする対応策として家族国家観が強調され、その浸透がはかられた」(石川一三夫「地方改良運動と地方体制の再編」という立場から当時の地方における郷党意識の変化をとらえている。

xxiii 太田登『日本近代短歌史の構築』晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄』(八木書店 二〇〇六年)

xxiv 安部宙之介『続・三木露風研究(近代作家研究叢書〈8〉)』(日本図書センター 一九八三年)

xxv 長尾宗典「第14講」『誌友交際』の思想世界』『近代日本の思想をさぐる』研究のための『5』の視角』(吉川弘文館 二〇一八年)

・日外アソシエーツ『20世紀日本人名事典』(二〇〇四年)

xxvi 本稿における『白虹』誌面の分析は、日本近代文学館の蔵書にもとづいて調査された。

xxvii 明石利代「岡山の文芸誌「白虹」を中心とする文学運動」『女子大文学 国文編(23)』(大阪女子大学国文学科 一九七二年)

xxviii 「地方文壇と言ふは中央文壇に対する言葉である。中央即ち東京に於て発表さるゝが中央文壇の作物で、東京以外の各地に於て発表さるゝが地方文壇の作物である。…然らば地方文壇は何が為めに存するか。地方文壇の特色は何であるか。地方文壇の特色は地方趣味である。…たゞ名のみ地方雑誌と称し毫も地方特殊の趣味の現れて居らぬものは地方文壇に何の役

にも立たぬものである。無暗に地方文壇なる言葉を呼号して中央文壇を真似たる作物ばかり掲載するは、よしや其の作者が地方に居住して居ても地方雑誌と称することは出来ぬ。地方、中央の区別は住居に依て為すべきでない。趣味に依て為すべきである。：『山鳩』の旭晃子はわが『白虹』が岡山の雑誌となつて仕舞つたから最早地方雑誌と呼べないやうに言つて居られる。：岐阜的でないから『山鳩』は地方雑誌と呼ばれるのであるか。：岡山の雑誌即ち地方雑誌ではないか。岡山趣味あるいは更に広く中国趣味を天下に発表するが即ち岡山に立脚せる地方雑誌の任務ではあるまいか（『地方雑誌とはなんぞ』（「山鳩」の旭晃子に告ぐ）『白虹』明治四十二・一二）

しかし、第二章で登場した『文壇』支部長の学歴を考えた際、『文庫』『新声』の読者に「尋常科」「高等科」卒の青年も多く含まれたことが推測されたため、ここにおける指摘は実際の文芸投書雑誌の読者層を定義するものではなく、あくまで中等教育以上の学歴保有者が主な読者層として想定されていた共同体における小木曾の特異性を指摘するものである。

xxx

・「私が教育新聞で小木曾旭光先生の名を知ったのは、小学校の六年生頃だったと思う。それは次兄が読んで居たものである。その頃、次兄たち数名のグループが小学校の梶本と言う先生の家へよく出入りして居たから、そこで手に入れたものらしい。そのグループには、いま県の厚生課長伊藤榮次氏も居られ、氏は当時は農業の傍ら苦学中であつて、確か銀海とか云う雅号で短歌を作つて居られた。私は中学校へ入学してからも時々教育新聞を読んでいたし旭晃先生の自叙伝「逆境に苦闘して」も当時次兄が持っていたので読んだ。そして旭晃先生に一度お会いしたいものだと思つたことがある」

（野々村貞一「文学的回顧」『生活と文化』昭和二十五・七・一）

・「其頃小木曾旭晃師が編集していられた「山鳩」は吾等少年から見ると程度の高い地方文学雑誌で、投書など思い及ばなかつたが、旭晃師は文学少年の崇拜人物で、特に依頼して短歌の詠草や俳句帳を送り、添削指導をうけたものだ」（早川慶太郎「早川孝と僕」『生活と文化』昭和二十五・九・一）

・「自分が本誌を知つたのたまたまだ小学校に居た頃のことであつた。ある日のこと、校長先生から表紙の美しい教育新聞を一部分けて貰つた。確か20號だつたと記憶してゐる。小木曾先生の教育的訓話、山川村羊先生のお伽話、それから中学

文壇、小学文壇、和歌、俳句、その他あらゆる方面に亘って有益な記事が満載されてゐた。…その頃懸賞で五行以下の組立文も募集してゐた。愈々明日が締切といふ事であつた。学校から帰るや直ちに一生懸命に組立文を作つた。それを先生にも秘密で投書したのであつた。是がそもそも私が文芸に志した第一歩であつた」（玉田芳水「僕の投書家時代」『教育新聞』大正十二・七・一〇）

xxx

・「終戦後文化の復興とか文化の創造とかいふことが盛んに唱へられつゝあるそれは戦禍による文化の衰微または壊滅を惜みてのことである。元来文化とは政治、宗教、教育、科学、文芸、美術、演劇など頗る広義に亘るから、文化の復興無くして国家の再建はあり得ない。今日の世相からいへば都会中心の文化は「戦災都市をいふ」近き将来に期待できない。むしろ地方文化の発達が急務である。つまり中央集権よりも地方分権に重きをおくことである。…地方文化はローカルカラーの發揮を以つて第一義とする。…戦災から地方へ疎開した知名文化人は少なくない。…しかしローカルカラーの發揮にどれだけの熱意があるかは疑はしい。われらはあくまで地方文化の發達を念願し、これが促進運動に協力せんとするものである。本誌發行も主としてこの目的に外ならない」（小木曾旭晃「地方文化の開発」『地方文化』昭和二十一・七）

・「私は思う郷土文化とか地方文化とかの意義や解釈は中々複雑していて諸説區々であるが、地方文化とは一地方の風俗民芸、歴史などその地方の持つ特色を發揮し品性陶冶に資せしむること、これによって言語や態度の優雅、衛生思想の發達、宗教的情操の涵養などを図り、生活即文化という如く究極するところは快適な生活を営むにありと信ずる、…其地方々々の特色を持たせることが肝要で、又自然にそうなつてくるのである、例えば文芸や美術などは長良鵜飼、養老瀧、ライン、恵那峡、アルプスなど県下の名勝が多く優れた作品となつて現れる、…それらは皆中央に求めて得られない地方特有のものであつて文化として深い意義を持つのである」（小木曾旭晃「地方文化の開発」『地方文化』昭和二十一・七）

・「百鬼夜行的罪惡の巷たる都市の実相は断じて戦前のそれではない、全く隔世的の墮落ぶりである、その罪惡的なことは何よりも警察や検察庁の犯罪増加率と種類が一番よく〇〇立てておる、だから今日の都会文化には健全性がなく、どことなく歪んでいる、…地方文化、わかりやすく言えば農山村文化は都会ほど脱線的ではないが、一部には都会カブレのい

かがわしいものがある、しかし大体において農山村文化は景気次第で消長がある、…そして都会ほどあくどいものでないから比較的健全性がある」(小木曾旭晃「地方文化と公民館」『生活と文化』昭和二十六・一・一)

「大體素養の乏しいものが徒らに高尚で理解の困難な書籍を読んで、修養しようとするのは間違つてゐると思ふ。昔の學問修養は多く武士道を本位としたから、漢籍の如き難解のものでもよかつたであらうが、時代を異にして欧化主義の風が吹きまくり、新思潮が澎湃として押し寄せてくる明治時代にありては、妄りに旧套を墨守してゐるは仕方がないことである。兎に角私は耳の不自由なお陰で旧式の學問修養を避け、平易で通俗な新聞雑誌ばかりによつて、社会の事情を知ると共に、普通の常識養成に資したのであつた。…私は自身の経験によつて、學問修養といふことは、先づ卑近な手近なものから始めて、相当の知識や能力を涵養し得てから始めて高尚な修養書に着くのが適當であることを注意したいと思ふのである」(小木曾旭晃『逆境に苦闘して』四十五頁)

参考文献

- ・明石利代「岡山の文芸誌「白虹」を中心とする文学運動」『女子大文学 国文編 (23)』(大阪女子大学国文学科 一九七二年)
- ・安部宙之介『続・三木露風研究(近代作家研究叢書(8))』(日本図書センター 一九八三年)
- ・石川一三夫「地方改良運動と地方体制の再編」『中京法学 (30)』(中京大学法学会 一九九六年)
- ・上野繁昌史編纂委員会編『上野繁昌史』(上野観光連盟 一九六二年)
- ・運輸五十年編纂局『運輸五十年史 上巻』(芳文閣 一九九一年)
- ・遠藤英樹・松本健太郎『空間とメディア…場所の記憶・移動・リアリティ』(ナカニシヤ出版 二〇一五年)
- ・太田登『日本近代短歌史の構築…晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄』(八木書店 二〇〇六年)
- ・大本達也『新体詩抄』による日本の「詩」の本流形成、明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(12)、『鈴鹿国際大学紀要』(鈴鹿国際大学 二〇一五年)
- ・岡野他家夫『書物から見た明治の文藝』(東洋堂 一九四二年)
- ・小木曾旭晃『逆境に苦闘して…小木曾旭晃自叙伝』(旭晃自叙伝刊行会 一九三二年)
- ・小木曾旭晃『地方文芸史』(教育新聞発行所 一九一〇年)
- ・小木曾旭晃『地方文芸史』(大衆書房 一九三九年)
- ・河井醉茗『醉茗詩話』(人文書院 一九三七年)
- ・河野省三『教育の友…若い頃の思ひ出』(玉光会 一九五五年)
- ・木村勲『鉄幹と文壇照魔境事件』(国書刊行会 二〇一六年)
- ・斎藤茂吉『明治大正短歌史』(中央公論社 一九五〇年)
- ・佐藤義亮『生きる力』(新潮社 一九三六年)
- ・佐藤俊夫編『新潮社七十年』(新潮社 一九六六年)
- ・島村健司「文壇と投書雑誌と投書家共同体の力学」『文章世界』のなかの横光利一(白歩、左馬)、『國文學論叢』(龍谷大学 二〇〇四年)
- ・関肇「文学青年の勢力圏」『文庫』における読むことと書くこと、『新聞小説の時代』(新曜社 二〇〇七年)
- ・高井有一『夢の碑』(新潮社 一九七六年)
- ・田中保隆「新声・新潮1」『文学24 (3)』(岩波書店 一九五六年)

- ・長尾宗典「高山樗牛と「田舎教師」―世紀転換期における「文明」批判の精神―」『社会文化史学(51)』(社会文化史学会 二〇〇九年)
- ・長尾宗典「「誌友交際」論序説…高山樗牛・姉崎嘲風の高等中学校時代をめぐって」『近代資料研究(12)』(日本近代史研究会 二〇一二年)
- ・長尾宗典「第14講:「誌友交際」の思想世界」『近代日本の思想をさぐる:研究のための』5の視角』(吉川弘文館 二〇一八年)
- ・永嶺重敏『「読書国民」の誕生―明治30年代の活字メディアと読書文化』(日本エディタースクール出版部 二〇〇四年)
- ・永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール 一九九七年)
- ・前田愛・加藤秀俊『明治メディア考』(河出書房新社 二〇〇八年)
- ・水上勉『筑波根物語』(河出書房新社 二〇〇六年)
- ・水谷悟『雑誌』第三帝国』の思想運動 茅原火山と大正地方青年』(ぺりかん社 二〇一五年)
- ・宮崎睦之「講義する雑誌、講義する書物―新潮社・明治四十年、投書雑誌の黄昏にて」『立教大学日本文学 82』(立教大学 一九九〇年)
- ・柳田泉『幸田露伴』(中央公論社 一九四二年)
- ・柳田泉・谷川恵一他校訂『随筆明治文学』(平凡社 二〇〇五年)
- ・柳田国男『都市と農村』(岩波書店 二〇一七年)
- ・柳田国男・富木友治・高井有一『平福百穂書簡集』(翠揚社 一九八一年)
- ・藪内吉彦・田原啓祐『近代日本郵便史:創立から確立へ』(明石書店 二〇一〇年)
- ・山内七郎「「文庫」と横瀬夜雨」『近畿大学教養部研究紀要14(3)』(近畿大学教養部 一九八三年)
- ・山縣悌三郎『児孫の為に余の生涯を語る』(弘隆社 一九八七年)
- ・山本弘文『交通・運輸の発達と技術革新―歴史的考察』(国際連合大学 一九八六年)
- ・横瀬夜雨・横瀬隆雄編『横瀬夜雨書簡集:河井醉茗宛』(横瀬夜雨記念会 二〇〇九年)
- ・吉田精一『近代日本文学史』(山田書院 一九五七年)

《謝辞》

本研究を進めるにあたり、指導教官の後藤嘉宏教授には多大なご助言を賜りました。厚く感謝を申し上げます。また、副指導教官の綿拔豊昭教授、静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科時代の卒論指導からお世話になっている水谷悟准教授のおふたりには資料の分析や研究手法に関してご指導いただきました。感謝いたします。そして、外部生として筑波大学に修士課程から入学した私をゼミ生として温かく迎えてくださり、深夜にわたる長時間ゼミを共に過ごした後藤研の松崎愛さん、及川和也さん、宮崎恵実さん、駱泓さん、松井勇起さん、綿拔研の田中鞠衣さん、三末千尋さん、入学時からお世話になった照山研の末岡真里奈さん、抄録検討会をしてくださった山海研の馬場和那さん、資料のレファレンス相談にご協力いただいた大沼宜規さんに厚く御礼申し上げます。感謝の意を示します。